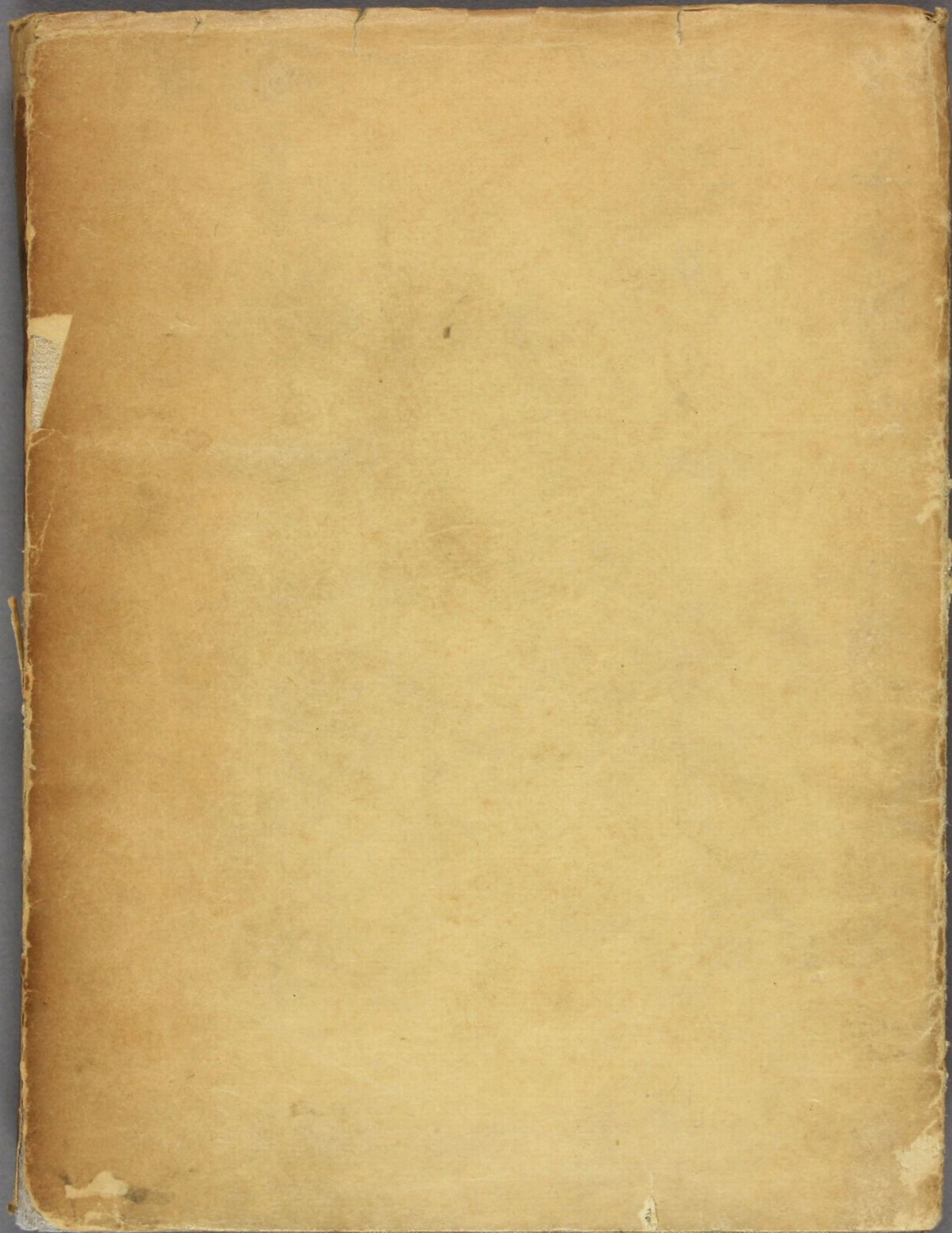






今夕イスト新喜の詩







版六十

佐久間政一著  
表現派の藝術  
定價壹圓五拾錢  
送料八錢



イスト新吉の詩

版四

税所篤二譯  
ゴオガンの手紙  
定價金貳圓  
送料八錢

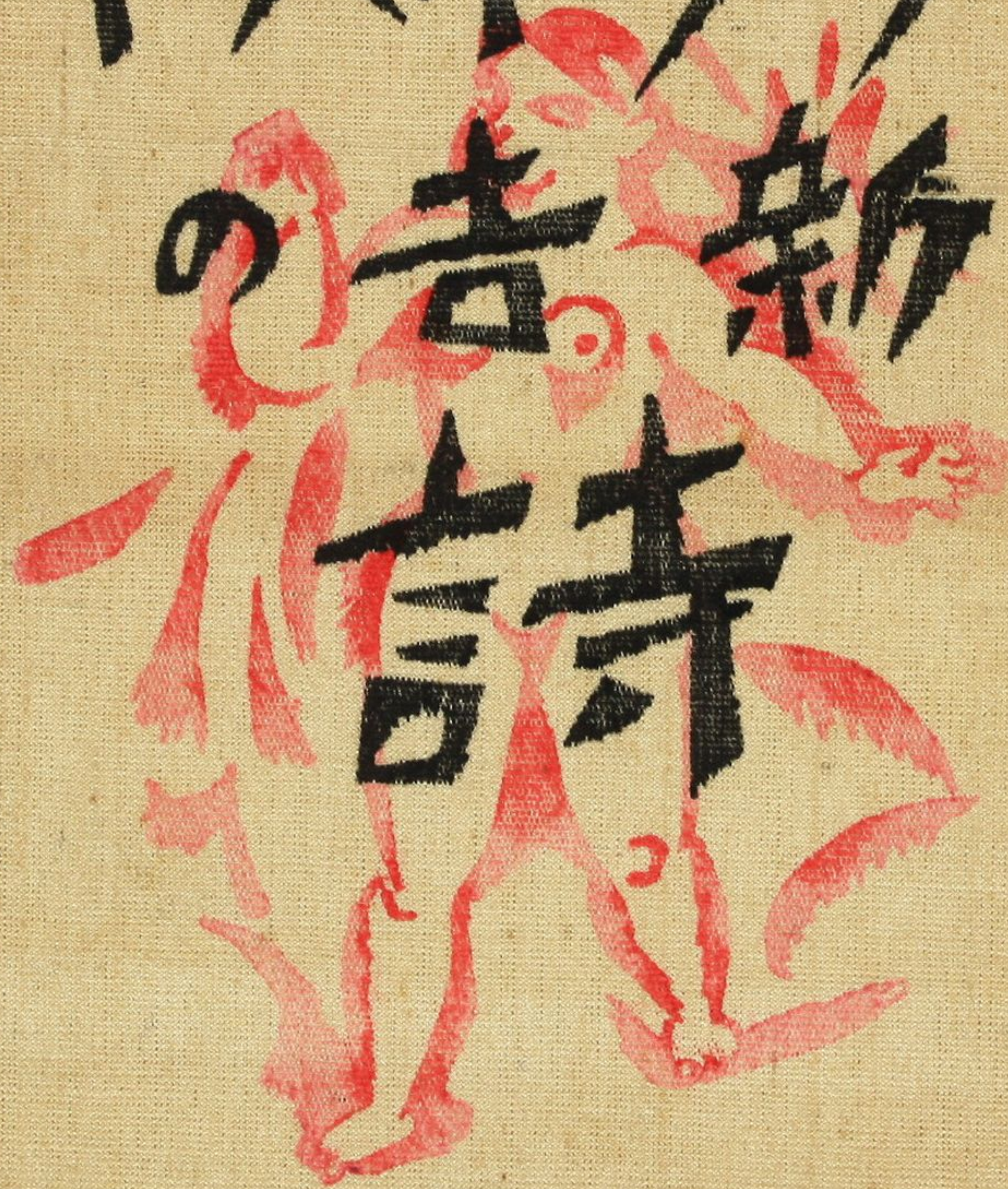




トスイウウ

の新

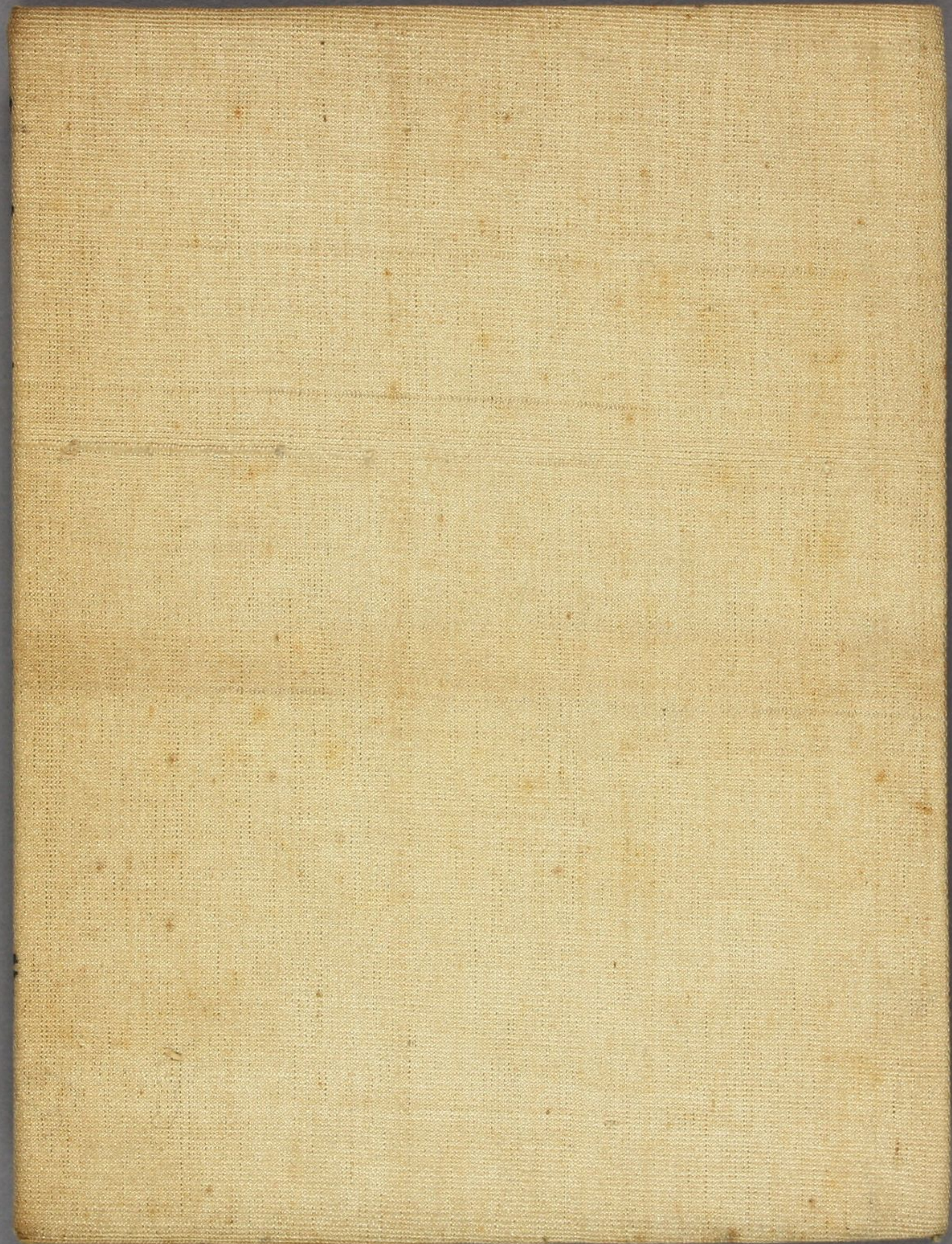
詩



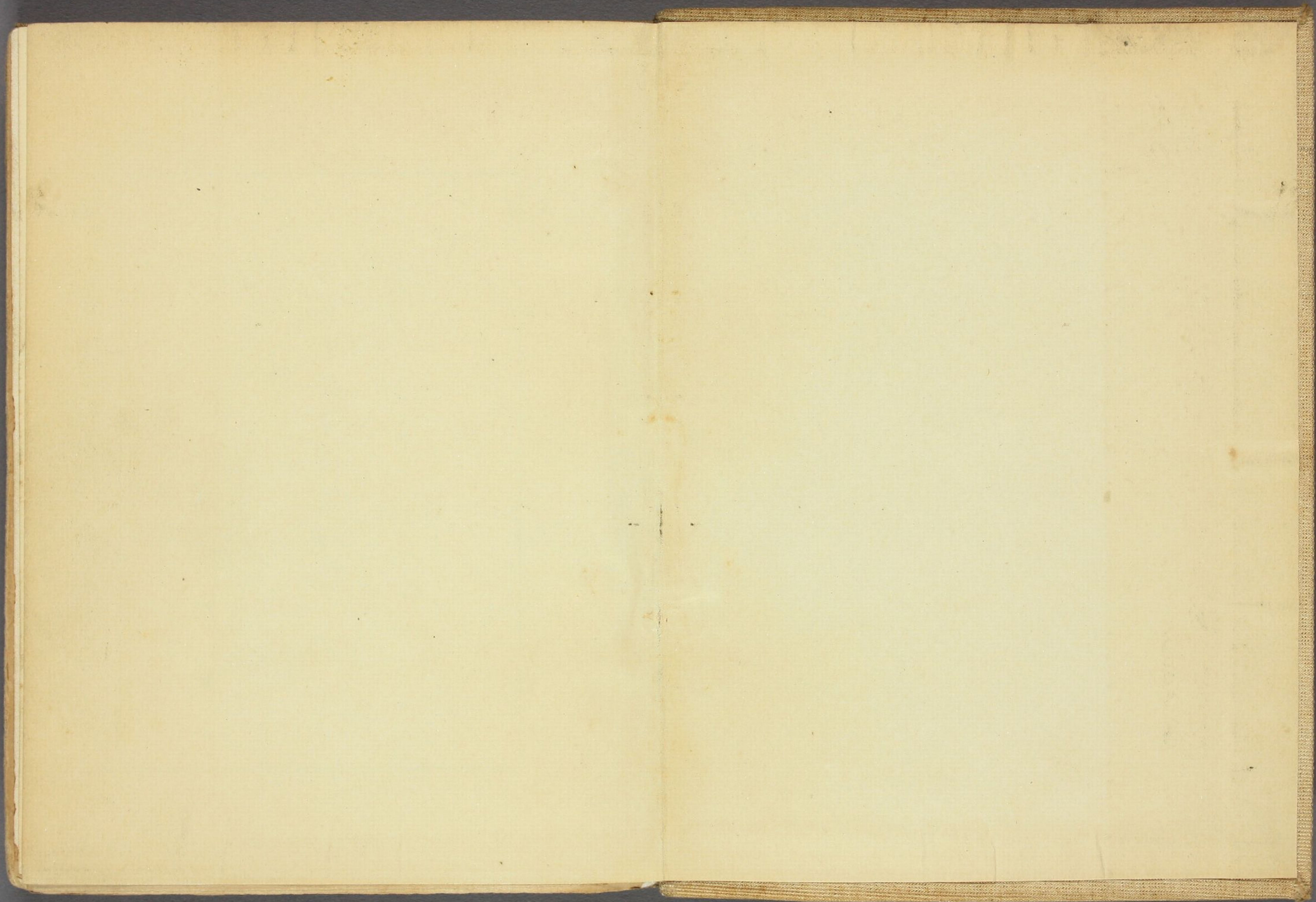










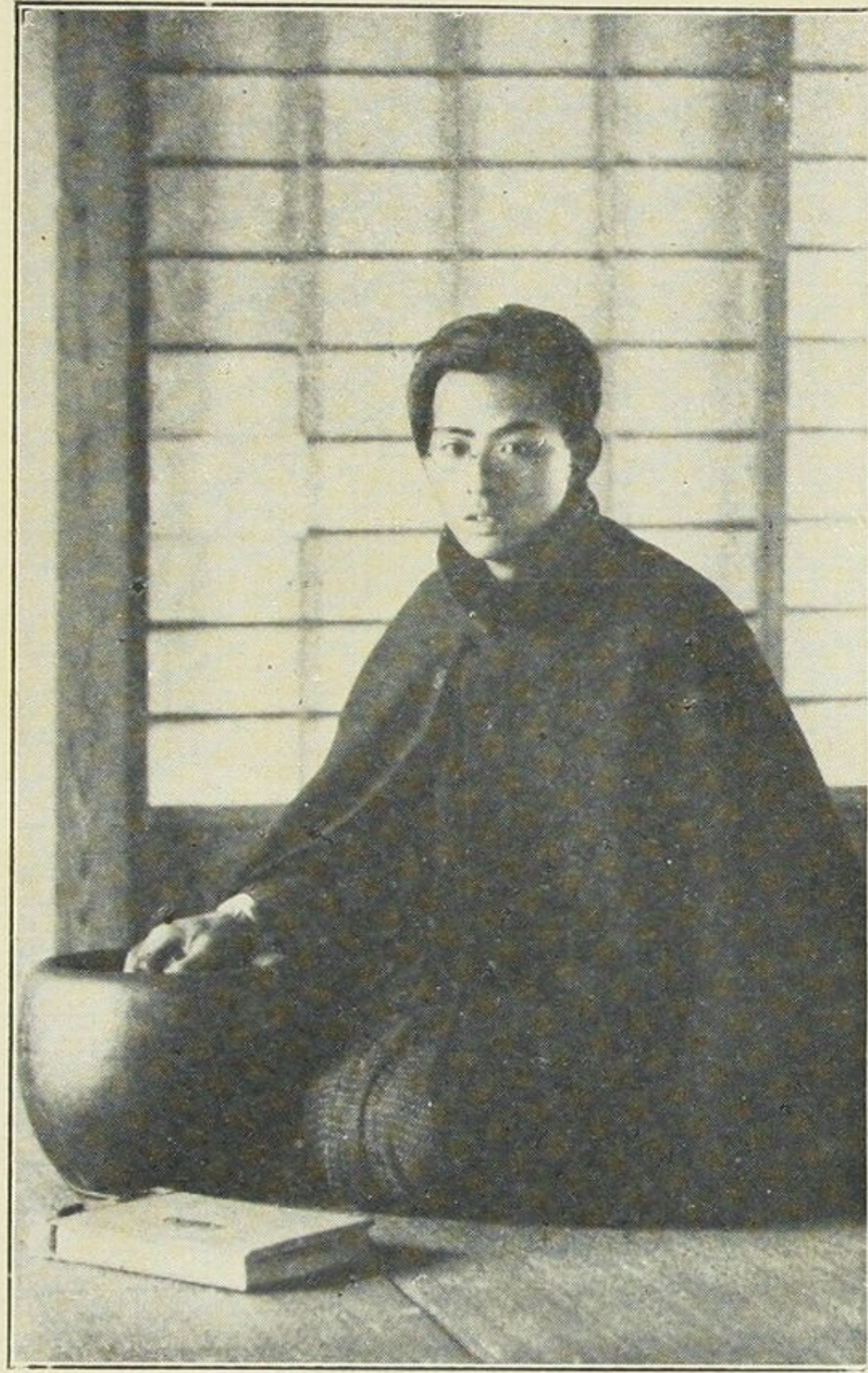




ダダイスト新吉の詩

辻 潤 編  
佐藤春夫 讚序





高橋新吉



## 高橋新吉のこと

### 1

(1)

僕だつて所謂知名の人間だらうじゃないか。——こんなことを言つてイバルわけじゃない。さきを讀んで見よ——知名の人間だから、見ず知らずの人間そのものが舞ひ込んだり、そんな人間の手紙が舞込んだりすることも月に二十ぺんぐらゐある。これは正直に言ふが實にウルサイことだ。手紙の場合はどう返事を書いていいかわからないし、さて書かずに捨てて置



くのも氣になるし、が僕は手紙の十中八九までは放つて置く。放つて置きながら相當永い間忘れずにて氣になつていけない。返事をする時だつて別に擇り好みをしての上にはない。その時の氣まぐれで書くだけの事だ手紙にくらべると、人間が直接に舞ひ込む方がまだよつほど始末にいい。人間の方だと僕はどんな人間だつて追ひ歸すことはしない。ともかくも會つて見る。けれども僕はそんな人間によつて得とくをしようと思掛けないから従つて彼等の機嫌をとるやうな必要はない。それでも三四年前までは何かしら生來の社交性といふやうなものが残つてゐたと見えて無意識ながら相手を氣兼ねしたり眼中に置いたりしてゐたが、近ごろになつてそんなことは全然なくなつた。僕はどの人間が目の前にゐてもその人に左右される事

なしに、偶然そこに居合せたぐらゐに心得て、僕のその時折の氣まぐれを主觀的な氣持をそのまま吐出したり行爲したりすることが出来るやうになつた。これがまた自然な大變にいい對訪問者術であることがわかつた。即ち初對面で僕といふ人間をムキ出しに發表してしまふ事になる。それで愛想をつかした人間はもう二度と再び僕の面前へは現はれない。それでいいのだ。それにも懲りずにまた來る人間は先方でもどこか知らそのムキ出しのままの僕が氣に入つたのだらうから世話はない——僕の方でも僕の勝手な氣持を害しない以上は猫が遊びに來たつて犬が尾をふつて來たつて、たとひまた人間が訪ねて來たつて決して邪魔ではないことになる。—そんな風に僕の始めての人間に對する態度が決つてしまふと同時に、僕のところ



へは有難いことに、僕をオダテて出世しようとか、僕をエライ人間に祭り上げて自分もそのエライ人間の仲間にならうとか、そんな俗な卑しい考へを持つた人物は愉快にも一切出入しなくなつた。その代りに僕をエライ人間とは思つてくれなくなつたものだから先方でも、それぞれ勝手な熱を吹いて僕を感心させようとする。僕が感心しなくなつて、それでも別におこりもしないやうである。かうして僕のところへ自然と藝術上の宿無しのやうな、人間としてもあまり惻巧と思へないやうな——つまりは大學の秀才や家庭の模範兒などとは全く縁のない人物ばかりが出たり入たりする。僕はここで虚心で言ふが、かういふ人物に出入されることを僕自身、今は一種の人徳だと自惚れてゐるくらゐだ。それほど僕はさういふ人間が好きで

ある。たまに普通の人間がこんな連中と僕のところまで落ち合つたあとで僕がへんな人間を好きなのを見て、誰も彼も僕のことをイカモノ喰ひだと言つてゐる。然うかも知れぬ。實際このイカモノの味をおぼえたが最後どうしてもう有爲の青年などは見るのもイヤになる。

かういふ僕の友人の一人——その代表的な一人が、高橋新吉である——あつたと言はうか、あると言はうか。今や高橋はもう超人になつてしまつて僕の友達にはなつてくれないかも知れないから！

## 2

これは餘談だが、キリストといふ人はよほどのイカモノ喰ひだつたに違



(6)

ひない。大人より子供が好きで、學者よりも何も知らない者が好きで、金持より貧乏人が好きで、あまり信用のならない人間と知りながらその男に會計を頼んで見たり、さうして淫賣あがりの女と性交なしにつき合つて楽しんでのだ——今ひよつとそんなことを考へて見た。

3

高橋新吉が僕のところへ遊びに來たのは、タシカ去年——いや未だ今年か知ら、ともかくも僕の頭のなかだけでは割に永い間に感ずるが、何しろ寒い時だつた。そのころは妙な季節と見えて、その前後に氣違のやうな男が二人、浮浪人のやうな人間が三人、不良少年のやうな一團、相前後して

(7)

ゴタゴタと僕のところへ出入しだした。高橋新吉はその氣違ひのやうな二人のうちの一で兼ねて浮浪人のやうな三人のうちの一でもあつた。

或る晩始めて訪ねて來た高橋のことを、うちのものは、どうもあまり爽快な人相の人物じゃないと註釋をして取次いだ。僕自身玄關へ出て見ると年のころ二十から三十までの間の男で、オドオドしたやうな言葉で、つかれきつたやうな目つきで人を見上げる、そのくせ何となく人を食つたやうな太々しい様子で、古新聞のキレツパツへ大きくなぐり書きをした反古をつき出しながら面會を求めた。それを手にとつて見たが何のことだかわからないので、

「これや何だらうな？」と言うと、



「紹介状です。辻潤からの」と言ふ。

なるほど酔筆らしく書きなぐつた辻潤の紹介状らしい。辻からの紹介じやいづれはこの見かけに相違はず相當のイカモノに相違ないと思つたが、その日は何か用があつてゆつくり會つてはゐられなかつた。高橋はまた來ると言つたが時日の約束はお互にしなかつた。ただ晝間はダメだと高橋は言つた。何故かと聞くと、或る新聞社の食堂に居るから、朝の八時から夜の八時まで(?)立ちつづけで、その内に皿を何百枚とか洗ひ飯を何百杯とか盛らなければならぬからぐつたりするとこぼした。(彼の詩に「皿、皿、皿、皿、皿」とあるのはそのころの作である)さうして謄寫版刷の詩集見たようなものを二冊とそれから相當に部厚な原稿とを渡しながら、今度く

るまでにそれをちよつとでも覗いて置いてくれと言ひ置いた。その厚い原稿は「黒子」といふ失戀小説であつた。覗いて見たがへんなものであつた。小説は面白くまづかつた——當時の僕のロクでもない尺度に於て、いい惡いは超越してゐないが、高橋が希望したやうに賣れない事だけは確實な代物だつた。詩の方は解るやうな解らないものばかりであつた。

二度目に高橋が來た時に、私は彼の殘し置いたものの印象を正直に言つた。彼は謄寫版刷の自分の詩集をとり上げて説明づきで讀んで聞かせながら僕に感心を要求した。つまらないと答へると、彼は特色のある返事をした。

「ふむ！ つまらないですかね。さうですかね。なるほど自分でもつまらん



(10)

です。何しろでたらめですから、つまらんですよ。」

それは少しも反語的なものでもなくまた絶望的なものでもなく正直で同時に人を喰つた——言ひ得べくんば自分自身をも喰つたものだつた。それが僕には氣に入つた。彼が讀み上げたものうちでいくらか私にも面白いやうに思へるのが二つ三つあつた。それは面白いやうだといふと彼は無邪氣によろこんだ。話をして見るとこの男は何ごとでも相手のいふ事を突きつめて見なければ承知できないといふ風があつた。それがまた決して相手をやり込めることに興味があるからといふやうなイヤなものではなかつた。その點も僕は好きだつた。その晩、僕は話の序に別に深い意味もなく。

「それや泥棒をしたつてスリをしたつて、或は人殺しをしたつて」

と言ひかけると、彼は

「私はそんなことを——まあスリ見たなことをして居たですがね」

と平然とさう問もしない事を答へた。併しそんなことを吹聴してイバツてゐる風でも何でもなかつた。彼のすべての態度のなかには困憊と疲勞と眞實と自暴自棄と飄逸とがこんがらかつて混沌として、しかも同時にもうどうにもならない程度に融合しきつてゐた——その人間も、その作品、少くとも私にもわかるその散文的小品に於ても。

(11)

4

僕が高橋の作品で始めて感心したものは「生蝕記」である。第三回目に



僕を訪ねた時に、彼はその謄寫版冊子を僕に二部くれた。枯れ切つたその筆致と、しかも淡々と書き流したやうで實は周密な用意のある簡素と、世俗的な善惡などにコセコセと捉はれない心境とが正直なところ僕を相當に敬服させた。それが彼の自叙傳的作品であつて彼が十九の時に書いたものであることを知るに到つて、僕は、中流の家庭に生れて相當の教育のある青年がどういふ事情とどういふ心持でそんな境涯を送るやうになつたかといふ事をちよつと思議に思ふと同時に、それぐらゐの若さでこれぐらゐの投げやりな筆致と心境とをどこから得て來たらうかと考へると、どうやら僕は、少し不氣味な心持になつた程であつた。

その後、高橋は新らしいものを書くごとに僕に見せた。「生蝕記」のなか

に早くその萌芽を發してゐた彼特有の味は後になるほど鋭くなり深くなり複雑になつて來たとは言へ、だんだん斷片的になつてしまつて、纏りがあるといふ點にかけては「生蝕記」がやはり第一であると僕は思ふ。尤も高橋の藝術觀から言つたら纏りがあるとか無いとかいふことは少しも重大な價値でないであらう事は僕と雖も知つてゐるが。

高橋が僕によく原稿を見せた理由の一つとしては、いつも金に困つてゐた高橋が僕を通じてどこかへ原稿を賣りたかつたのだといふことは確である。しかし僕は一つも高橋の物に原稿の世話をしつた事はない。金で原稿を買ふ雑誌のすべての編輯者に、高橋の味はわからないといふ事を僕は心得てゐたからである。さうして僕は高橋にむかつてよく言ひ言ひした。



「君は半世紀進んでゐる第三流の作家だ。ただの三流の作家なら原稿は賣れるのだ。君は半世紀進んでゐる。そこが君の世間に通用する人になれる致命的な點である。」

僕は高橋に對つてそんなお座なりを言つたのじゃない。さう信じてゐるのだ。誰に向つてだつてお座なりを言ふ必要はない。しかし人がそれを要求すれば氣の弱い僕はうっかりそれを言はせられないとは限らない。しかし誰が高橋を目の前に据えてお座なりを言ふだらうか！ 事實、高橋は最も眞實を要求する人間であつた。さうして彼自身亦眞實であり眞劍であつた。——それがその、何と言はうか、つまり高橋流に眞實であり眞劍であつたのだ。氣質として彼は理想家であつた。理想を見失つた理想家であつ

た。さうして彼の作品のなかには見せびらかさない眞實感が切なく蹲つてゐる。前世紀のデカダンが美を貪つたのに對して、高橋は眞實を——人間にはどうしてもつかみ切れない眞實を貪り耽つて、さうしてその結果めちやくちやになつてゐる。——それに因つて、理想家高橋は深い現實家と亦一味相通じてゐる。さうして高橋は人間生活のあらゆる卑しさを現してはゐるが、然もその作品の背後には地上の腐肉に目をくれてゐる枯木のでつべんの寒鴉のやうに奇妙な品位が、無雜作に煙つてゐる。

私は斷言するが、高橋の散文的小品を見て、或る程度までそれに感心し得ない人間は、作者として批評家として鑑賞家として氣の毒にも、舊式な美學をあまり知り過ぎて美そのものを却つて知らなくなつてゐるのだ！



高橋は見識で書いたのではない。學問で書いたのではない。趣味で書いたのではない。人真似で書いたのではない。女房と子供とを兩脇へ座らせて會社の重役のやうな夕飯の幸福の後に、柄にないつくりごとの孤獨や憂鬱をなぐさみものにしたのではない。彼は身をもつて書いただけだ。妙に煙つたへんに歪んで心臓を取出して見せたのだ。高橋の文字のなかには氣まぐれらしい出鱈目はあつても虚飾といふものは寸毫もない。そんなものは高橋には七面倒くさかつたのであらう。さうして氣まぐれな出鱈目は？それは瞬間的ではあるがやはり眞實には相違ないじゃないか！——少くとも虚飾——俗情主義の論理井然や形態完美や情意透徹よりは！

## 5

高橋の詩は散文に比べてもつと出鱈目で氣まぐれに僕には見える——さうして、實際はこれ以上のことは僕にも充分に解つたとは言へない。が、彼の詩句のなかには散文に現はれたよりもひよつとすると「生理的な高橋」がある氣がする。

高橋は或る時、詩集を出すかも知れないからその時には僕に序を書けと言つた。僕は次のやうなことぐらゐでよいならば書かうと約束をした——高橋の詩は僕には解つたやうな解らないやうな具合だ。さうしてただ囁言のやうに思へる。生活感の悪夢に怯されて勞れ切つた肉體が意味のないこと——當人にもその瞬間だけしか意味のない事を呻き出すのじやあるまい



か。さうして囁言や寢言のなかにも面白いものも、白くないものもある。人々の見る夢にだつて個性がある。或は夢の中の方が實生活よりもつと著しい個性が出るかも知れない。ところで高橋の詩は、高橋の囁言と寢言とは、時々僕が聞いて面白いものもある。それはその出鱈目の言葉を通して高橋が悩まされてゐるその時折の悪夢を私も亦感知するからであると大たいそんな事であつた。高橋は彼の詩に對するその私の解釋に相當満足してゐたようであつた——少くとも、その日は、さうして言つた。

「それでいいのです。すべての詩はそれでいいのです」と。

「本當に高橋の詩のなかにも、私が見て面白いと思ふものがある。夜、橋の上から自分の外套を水のなかに投げ捨てることを書いたものごとき、

(彼自身はそれをエドガア・アラン・ポオのものに匹敵すると自負してゐたが無理もない事だ)、又は秋の庭のさまざまな花を歌つたものごときがその一例である。

⑥

ところで高橋自身が最も執着してゐたと思へる作品はと言へば、それは彼のものとしては最も長くその代りに最も喘ぎ喘ぎ書きつづけられてゐるあの「黒子」であつたやうに思へる。高橋はこの極くふしだらをそのくせ一字一句をも改めることの出来ない特色を持つた極めて個性的な作品を非常に金にしたがつてゐた。——金にといふよりは、彼からよく聞いて見ると



ただ活字にしたかつたのだ。彼はそれに就て私に告白して訴へた——どんなつまらない一文の金にもならない雑誌の六號活字でも出したい。さうしてそれが活字になつたところであの女に讀ませてやりたいのだ、と。あの女といふのは言ふまでもなくこの失戀小説——といふよりも一つの奇體なヒューマンドキュメント——の女主人公である。この非常識極まる泣き笑ひしてやりたいほどバカバカしくロマンチックな、そのために高橋の一生が今日のやうなものになつてしまつたとも言へば言へるところのその戀愛の相手のことである。この小説の寧ろ狂的な情熱に比べてはマノン・レスコオのごときは寧ろ何でもないものである。言はば、高橋の自分のひよつくり見た一夜の夢にその生涯を捧げたやうなものである。高橋のその女に

對する熱心は彼が正氣であつた最後まで實に異常なものであつた。その女の最近の宿所がわかつたと言つて手紙を出した。その返事を受けるところとして僕の宿所を書いて置いたとかで、もしやその返事がときはしないかといふので、思ひつめた且つは退屈でしかたのない高橋は毎日のやうに僕のところへ様子を見に來た。返事はとうとう來なかつたようである。高橋の口角に漂ふあの柔和で甘く哀れで少しばかり自分をも他人をも馬鹿にしたような微笑が今ふいと、私の目の前に浮んで來た。今、高橋の歪んだ理性のなかであの女がどんな形の幻影になつてゐるであらうか。知りた

いものである。



初めは十日に一度ぐらゐづつであつた高橋の僕への訪問は、そのうち殆んど毎日、或は隔日になつて來た。——僕のやうな他人に對して何一つ親切であり得ない人間を、それほど友達にしなければならなかつた高橋は不幸であつた。どこそこへ原稿が賣れたと言つてはそれを僕に報告して例の力ない微笑がその日だけは大分元氣に見えた。かと思ふとしほれ返つて何も言はなかつた時も多かつた。さうして彼を支配してゐたものは大部分その日その日の體の加減であつたように見える。よく議論をしたがる日があつた——それは寧ろきげんのいい日であつたが。高橋の説には大體僕はいつも同感であつた。ただ高橋の説に一々賛成してゐたならば、それでな

くてさへもどうしていいか解らない僕は、高橋と相擁して虚無の奈落へ心中しなければならなくなりさうで、僕にはさすがにそれが怖ろしかつた。それ故、僕はそんな場合いつも、僕自身が人生を光明的に見てゐる人間でもあるやうな顔をして、おしまひには僕は言つた。

「君のやうなダダをコネて見たつて世界中で誰ひとり困る人はないのだぜ、君が愉快ならいくらでもそんなヤケを言つて居たまへ……だが僕は知つてゐる、君はそんな考で満足しきつてはゐないのだ。それならこそ君はいら／＼して、僕などをとつかまへて食つてかかつたり説教したりするのだ。」

高橋は例のつまらなさうなしかしどこかしら可憐な微笑——それが彼の



顔に現はれた時だけはやつと二十二三の青年に見えた。

今再び僕はそのをはつきり思ひ出すが、それは思ひがけなくもしほらし  
い慚羞を帯びてゐて、さうして永いこと笑ひを忘れてゐた人間が、笑ふと  
いふのはかうしてするのであつたらうかと思ひ出しでもしたやうな、ため  
らひ勝ちな大儀さらな微笑を口角に漂はしながら「でも、どうもこんなこ  
とでも言ふより仕方がないのだ、どつちだつて同じ事だ」とそんな意味の  
ことでもつと微妙な言葉を、軽く力なく言つて、するりと僕の言葉の下を  
くぐり抜けてしまつた。あの時のあの微妙な言葉をそつくり覚えて置かな  
かつた事を僕は今ひどく残念に思つてゐる。あの言葉は實に簡明に彼の  
生觀を語つてゐたのに。さうして彼の理窟には一向へこまなかつた僕も、

彼のその心持には一言も有り得なかつた。思ふに高橋はいつも自分自身の  
事で自分自身と議論をする時にもやはりそんな軽い微妙な言葉で逃げまわ  
つて鼻をつけてゐるのだらうと思つた。その點で僕は高橋を不甲斐なく思  
つた——が、そんなことを言へた僕自身でもない。

〇

僕が留守のところへ彼が來た。取次の人が「留守だ」といふと

「嘘じゃないですか」と反問した——誰にも一度も居留守などは使はない  
僕だといふ事を知つてゐた高橋だのに。

「嘘じゃありません。御待ちになつたらいいでせう。ちよつと散歩に出た



のですから直さかへります。」

「歸るか歸らないか、そんなことはわかるものか」

そんなことを言ひ捨てて歸つた事もあつたさうだ。——よほど氣分の悪い日であつたのだらう。

一ぺん電車賃がないと言つたから僕は五圓サツを出して渡したら彼はそんなにはいらな<sup>い</sup>と言つて返しさうにした。しかし外には僕もなかつたから皆持つて行けと言つたら、「こんなに貰つてもいいのですか。これだけあれや僕は一月生活する」と言つた——彼の日常生活の脚註にもなると思ふからこんなケチなことを敢て書くのだ。

ダダイズムといふものがどんなものであるか僕は知らない。だから高橋がダダイストだかどうかそんな事も知らない。知る必要もない事だ。ただ僕は知つてゐる。高橋の藝術と生活とはアカデミシヤンの様子ぶつた藝術に對する又、平俗的幸福のなまぬ<sup>く</sup>い生活に對する徹底的の反抗と挑戦とである。彼の消極的な——いや消極をも積極をも超越した態度は、上述の意味で力強いものである。この精神によつて高橋は恒に生きる。彼は明治大正を通じて藝術史上に於ける著しく特異な個性である。澤山のゴマカシもののなかで彼はかけ<sup>ら</sup>になつて燦然としてゐる。僕は無論その偉大を説くのじやない。説かうにも偉大の一面は常に普遍的であるに對して高橋



(28)

にはそれがなかつたのだから。ただ彼には見る人にだけ見える暗示がある。

(一九三三年十二月三十一日・二三年一月四日)

於神戸 佐藤春夫

(29)

### 斷言はダダイスト

D A D A は一切を斷言し否定する。

無限とか無とか、それはタバコとかコシマキとか單語と  
かと同音に響く。

想像に湧く一切のものは實在するのである。

一切の過去は納豆の未來に包含されてゐる。

人間の及ばない想像を、石や鯛の頭に依つて想像し得る  
と、杓子も猫も想像する。



D A D A は一切のものに自我を見る。

空気の振動にも、細菌の憎悪にも、自我と云ふ言葉の匂ひにも自我を見るのである。

一切は不二だ。佛陀の諦観から、一切は一切だと云ふ言葉が出る。

一切のものに一切を見るのである。

断言は一切である。

宇宙は石鹼だ。石鹼はズボンだ。

一切は可能だ。

扇子に貼り付けてあるクライストに、心太がラブレッターを書いた。

一切合財ホントーである。

凡そ断言し得られない事柄を、想像する事が喫煙しない Mr. God に可能であらうか。

神はオールマイテイだとクライストが言つた。

D A D A は一切のものがオールマイテイだと断言する。

だからオールマイテイは、一燭の電球をオホーツク海に投じて、底の方で、時々灯つてゐるやうなものだと断言。



(32)

する。

D A D A は一切を否定する。

無我を突き摧く、粉々に引き裂く。

無二無三になつて無の所で、無理な小便をする。

佛陀は其處から蟻ほども退く事が出来なかつた。

D A D A は滞る所を知らない。

D A D A は一切を抱擁する。

D A D A は聳立する。何者もD A D A を戀する事は出来ない。

D A D A は一切に拘泥する。一切を逃避しないから。

(33)

物事に矛盾や調子を感じなくなつた舐瓜はダダイストになり損ねなかつた。ではない、矛盾や調子もダダイストなのである。

存在がダダ的なのだ。

凡てのものは穿き替えられ得る。

變化は價值だ。價值はダダイストだ。

誰かダダイストは、食べられないものだと言ひ得るだらうか？  
では舐められないものであらうか？



一切は食物だ。食物は無政府主義者だ。

或ダダイストは死んだ。それは彼が胎兒であつて、流産するよりも一世紀も前の事だ。

千九百廿二年十月九日午前零時三十四分に、地球はお玉杓子の眼球、乃至人間の眼球位に収縮すると豫覺したダダイストがある。ハツキリとしてゐる。彼は不死身である。一切の豫言は的確だ。

或ダダイストは、夫を飲めば半千年の間、少しも食物を

攝らないで、息災に働く事の出来る薬を發明した。

彼は階級戦がたけなはになつたら一服宛プロレタリアに分配しようと待ち構へてゐる。

北極から一輪車で、一秒間と廿二忽しかかゝらないで、若い女が僕の所へ尋ねて來た。

彼女はブルジョアを憎むと言つた。

資本と聞いてさへ身顫ひするのであつた。

妾は凡ゆる金銀白銅白金を瞬間に唾液にして了ふ磁石を持つて來ましたと彼女は言つた。そして呪文と其の唱へ方



を僕に教へた。

何時でも構ひませんから、あなたが必要だとお思ひになつたら――

彼女は燐光的の發音だつたと或ダダイストは話した。

空のマッチ箱と、若干の秘密を右の袂に入れてブラ／＼彼は炎熱の電車線路を歩るいてゐた。

彼は此の頃になつて場末の居酒屋を彷徨き廻つて夜更しも女郎買も止して、ピュリタンになつたと仲間のものに噂されてゐるダダイストであつた。

彼は下駄を脱ぎ棄て、裸になつた。それから着物を丸めて、線路へ叩き付けた。

袂から煙が出だしたのである。

交番も直ぐ其處にあつたが、巡查も恐がつて寄り付かなかつたのである。

彼は、燐寸の擦火で、太平洋を沸騰さすことは易々たるものだ、と此の間も話してゐた。

或る男は朝起きるとから毎日、寢床に這入つてからも拳銃を離さないで、射撃の練習をしてゐる。



此のダダイストは市街戦で、七千萬の人間を打斃さない限り、ピストルを手から外さないと言つてゐる。

一人のダダイストは、どんなにくだらないつらい生活でも好い、死ぬのが厭だ、一呼吸でも永く生きて居たい、と遺書の中に書いてゐた。

彼は或結社の三階の圖書室の電燈の紐で首を縊つて死んだのである。

生前彼は非常に温厚で、結社の規約に違反するやうな言行は一度もなく、皆のものから絶対に信頼されてゐた。

又色々の涙を、化學的に分析したりして博士になつたダダイストもある。

D A D A は一切のものを出産し、分裂し、綜合する。

D A D A の背後には一切が陣取つてゐる。

何者も D A D A の味方たり得ない。

D A D A は女性であると同時に無性欲だ。

だから生殖器を持つと同時に、凡ゆる武器を備へてゐる

D A D A 位卑屈なものもない。猛烈な争闘心を腰にブラ下げてゐるから瞬時も絶え間なく彼は爆發し、粉碎し、破



(40)

壊しつゞける。

一切のものがDADAの敵だ。

一切を呪ひ殺し、啖ひ盡して、尙も飽き足りない舌を、  
彼は永遠の無産者の様にペロペロさしてゐる。

八・十四

(41)

### しん D A 廉吉

彼は熱があつた。三十九度過ぎなので體を動かす事が出来なかつた。病院へ運ばられないと細君が言つた。

僕は彼がザツクソン氏の癲癩にならうなどとは思はなかつた。

不瞬と妙香の電球を  
付けては揉ぎ



付けては揉ぎ消す

蠅蟻の心を鹽漬にする處女である。

芋にバタを付けては舐め

付けては舐める。

戀人は鈍刀である。

僕は君のお母さんに生魚の精神を見る

鍋の中でアブ／＼撥ね返る川魚の精神を見る。だから君を信賴する

君のお母さんは多分狂人におんななさるだろう。

停電が二十分も續いたのであつた。

何にをして居るのだろうと僕は思つた。

座敷へ通ると電燈が來た。見ると彼の鼻がブク／＼膨れ上つてゐた、まさか梅毒だとは思つてゐなかつたに、性的の色をしてゐたのであつた。

彼は運轉しない時の發動機の様になりたがり

神の有せし統御は移して全生活の有機的關係となり、此處に動物的運命の暗黒、停滯齟齬、屈從の状態から免れ、機械的直情の徑行は、光輝となり、熱となり、不斷の律動となる、などと書いたりしてゐる。



(44)

僕は彼の伊太利語の本の積み重ねてある部屋で、紅茶を五杯飲んだ。

燐光の竊盗兒、肺病、脚氣、僕ははな垂れであるので、此の世はシャツボだと云ふ様な事を彼に話した。

自分の死顔が見たい。誰だろう、私の骨を拾ひよるてな事は、神経衰弱の標本であると彼は言つた。

彼は交接市場を建てようかなどとプロレタリア染みた事は言はなかつたけれど。

病院の臭みを蔽ふ大東京市、汝の上に玫瑰色の夕陽を祈り給ふ聖母の如く、我はよきアスマアルトの街道を祈る。

(45)

市民の音楽の歩行を祈る。などと祈つて居る。

迎へて来たカンデラブルムと一緒に、僕は自動車に乗つて彼の病室に訪ふた。

彼は二十分間毎に痙攣を起してゐた。

新聞に、彼が佛様の本能を直感したいとか言つて、あの世へ未來派宣言運動旁々派遣されたと云ふ消息が出た時、僕は聊かムツ痒いと同時にうはづつた氣持になつた。

それは昨年十一月號の炬火にプロックの詩を譯した後で、斯んな事を書いて居た事を思ひ出した爲ばかりではなかつた。



最近アレキサンドル・ブロックブルコフの死が傳へられた。事實とすれば、この優秀な露西亞の詩人を失つた事を悼まずには居られない。その意味から此處に貧しいながら一編を譯して記念としたわけである。

彼は本名は平戸ではなかつた。

衣なく

念おもなく

日なく

群來る。

靜物の夢を織れ。僕は心を上の空にして詩を書かうと思

ふなどと、僕に話した事があつた。

彼は郊外電車の中で體を揺られ乍ら詩をまとめるのが好きだと話した。

彼と最後に話した時、彼は露伴の出處を推奨してゐた、あれから暗示を得て長い物を書くと言つてゐた。一つ文自分の快心の詩を拵へて、それを毎日お經の様に繰り返し、植物的な生活を送りたい氣がすると彼は言つた。

彼は岩野泡鳴の追悼文を何にかに發表し様と言つてゐた  
瓜園、厨房、毬子は最初の日本詩集に載つてゐるが、あんな柔らかなものを作りよつた君が、螺旋階段とか、第四



側面の詩とかを作る様になつたのが解らないなどと、好く云ふ奴があるので弱るなどと、言つて居た。

僕は彼の成功を祈つて、彼がゼンマイ仕掛の首が箱の中から飛び出る詩を作つたがあんなものを時々、僕にあの世から送つてくれる事を待ち遠しがるうと思つて居る。

私は指で書く

鼻だれで書く

大便を拭いだ紙に書く

煙管で○○を吸ふ人には

私の詩は無用だ。

此れはダガバンと云ふ詩集の序文だが、彼に見せた時彼は涙を溜めてゐた。

最も口が六に利けなくなつたのであつた。

ザツクソン氏の癲癇と云ふのは、脳髓に梅毒性の腫物が出来る爲、全身の痙攣を起すのであつた。

彼は物凄しい顔付をした。それは未來派の繪そのものであつた。脳が充血すると不可なと言ふので氷まくらをして氷嚢を四つも紐垂らして頭を凍らすのであつた。(彼は東京



市が化石したような小説を書いた事があつた)

短剣ジャツクの一踊り

海洋詩集を書きました

彼は熱が高いと口を听かなくなり、熱が低いと、此んなうはごとを言ふ様になつた。

左半身は痙攣が起ると五分間位続くので、其の間丸で破損した扇風機の様振動するのであつた。首も左側に捻ぢ曲げられ、鼻柱は白い鼻骨が露はに飛び出て、眼はジャクロの様になり、口からは涎をダラ／＼垂らすのであつた。

せんめんき

痙攣が終ると、青い腐敗つたトマトの様な反吐を洗面器に一粒吐いた事があつた。

彼は失戀した事のない男であつたらしかつた。

小便は垂れ流がしであつた。滋養灌腸をする時脱腸してゐるので、若い看護婦は彼の爲に指を肛門へ三寸も差し入れなければならなかつた。

脊中は床ずれで段々肉が蝕えて來てゐた。

ソングエ

ホーガエ



樂書をした落雁をみんなが食べた。

はらみ女がそれを跳飛ばして歩き出した。

梅毒性の天才ばかりになつた。

ピカピカの繪は、胃痙攣の藥にもならなくなつた。

子宮痙攣の音樂も癲癇の舞踏も流行なくなつた。

電車の中で僕は此んな詩を作つた。

夫は消毒用の石鹼の匂ひがしたので、夜なきうどんとユズを思ひ出したからであつた。

頭がボーとして來たのである。

金鹽に咲く花

昇汞水撫子

ゑゑん、ゑんびつ

腕に注射をせぬよう

顛倒

消ゴム

肋骨の溝に匍はす。

僕は銀座通りを歩るいてゐても、向ふから來る美しい女が、直ぐにザックイン氏の癲癇を起しそろにしてならない。



不安に襲はれるようになった。それは斯うであつた。

病室には僕以外誰も居なかつた。

匂ひの全音階と、光のカメラランが亂舞しようとしてゐた。

白いガーゼが彼の顔にかぶさつてゐた。鼻も口も目もかぶさつてゐた。目が恐いので、かぶさつてゐないと、細君は傍に座つて居る事が出来ないのであつた。

所で廉吉氏は何にかつぶやいてゐる様に僕に思へたので僕はガーゼを外した。右の方の手をオノマトツベ的にヘラヘラ動かしてゐる。

鉛筆と便箋を貸してくれと言つて居る様に思へた。それで鉛筆を右の手に持たしてやつた。便箋を胸の上に置いた。彼は嬉しそうな顔付をして何にか書き出したのであつた。けれども便箋を動かしてやらないと一所に重ねて書くので不可なかつた。

僕は此處に見えざる素因の數學的記號や、匂ひや音からなつてゐる、燈火の世界の文字を見た。

過去の未來である様な氣がした。

オンバザラ タルマ キルク、

ダダは子供らしさに於て精蟲見たいだ。



兎に角扇風機を持たして見ろ。

それから段々鉛筆の字が薄れた。

便箋を十枚も書き汚してそして初めは鉛筆の心を口で舐めたりしたものであつたが、今度は逆さまに持ちかへて、消ゴムの方を下にして便箋の上をなすくり出した。

四次の概天念はある學者達によつては、この概念を用ひねば説明し難き或る超物質的現象を説明するに用ひられてゐる――

電氣仕掛の靈魂體の文字が消えた。

それで僕も太儀になつたので、便箋を胸の上からとつて

やつた。

それで彼は胸の上へ次の様な詩を口から吐き出した

x

大便に

時計の針があつた。

痔否々々々々々々々々々

欠伸した病人の齒莖に

空間が産する。

醜惡はメロデー

DADDDDDDEAD,



### 寫聲蓄音機

「寫聲蓄音機を買わうか」

「シヤセイですつて？」

骨がましい肩をいからして

妻は驚きの目を見張つた。

「ケツれば幾回でも使へるんだそうだ。

書かないで自分で言つて、それを聞き乍ら書けるんだそ  
うだ」

「材料にでもなるんですか」

「お前の筆記が省ける譯だよ」

性的學者は、妻に嫉妬を起させる様な事を言つたりした  
事はなかつた。女の興奮しないのに〇〇するのは骨が折れ  
るばかりだと言ふ事を知つてゐたから

「何だか怪しいものですわ」

妻の顔にレコードの小刻みな皺が現はれた。

「馬鹿にしては不可ないよ」

立つて抽斗から出して、寫聲蓄音機の廣告を見せてやろ  
うか



昨夜の葱汁の残りを、妻がヨソツてくれた不味そうに性的學者はそのまま腰を下ろした。或時性的學者が、台所と椽側の通路に紙を貼る事を主張した。

オルガンの荷造りの板を打ちつけてその上に貼れる丈の紙はいくらでもあると言つて止まなかつた。

椽側の隙き間隙き間には

柿色の紙を貼り

戸袋の横の暗室を拵へえと言つては

頭がつきぬける粗製のピンを買つて来て

一日それにかゝりきつてゐた。

妻は自我主義者であるので新聞を讀んでゐる

二つになる女の子は、部屋中をいざりまはつて

障子や襖の紙をバリバリ破るのだつた。

刷毛を買ふ事を性的學者が妻に圖つた時

妻はどうしても聞かなかつた。

そこで言つた。

『うどん粉を買つて來ようか

糊の素はおしまひだよ



あれぢや好く付かないから駄目だよ』

『シッコシッコシイッツイツツツツ

だめだめ』

妻も言つた。

女の子はセルロイド製のオモチャを持つたまま、餽色の小便を疊にしてました。

細引を隅から隅へはりまはして

おしめや、妻自身の腰巻が、かけならべてある下で、性的學者は、金槌を持つて考へてゐた。

甚い風が、何時土手の上から吹いて來るか解らない。

けれども妻は、晴れた日には富士が見える、此の家の住心地を、大して好んでゐるらしくもなかつた。

『お父さん、おしめをとつて下さいな』

或日妻が言つた言葉は之だつた。

『子供は半分半分ですよ』

妾知らないから

そんなにしてごはんが焚けますか』

椅子に腰をかけて

常にジャケツを着てゐる性的學者は  
おとゞしからのホンヤクの原稿を



積み重ねてみたが、未だ原書ほどの高さにもなつてゐなかつた。

その時姦風がコスクも吹いて

原稿紙をあふりたてゝ

部屋中撒き散らした。

ねそべつてゐた妻の顔や

少し變にこぢれた足及腰の上にもあふひかぶさつたのだつた。

白い白い紙の

幾億枚となくまきちらされた

其の下の方から、桃色のものが

ほのかに息をしてゐる様を、妻は想像に描いて

夢みがちな目を、寸時ふりかへした丈だつた。

子供は喜ばしそりに、いたんで、音の出ない所の澤山あるオルガンの下で

フラ／＼、両手を動かして、原稿紙をむしやくしやくにしてゐた。

『だからお前刷毛を買はなくちや不可んよ

冬になつて雨戸をいづもしめて居らりようか』

性的學者は落ちついて、それでも原稿紙を一つ一つ拾ひ



集めた。

夕方になると脊の高い豆腐屋が、土手の上できまつてラ  
ツパを二度吹いた。

『トーフやさん』

性的學者は障子をあけて、腰かけたまゝ呼ぶのだつた。

『揚げ十銭が下さ』

『へい揚げ十銭』

『やすい脂肪だ』妻は此れ文は抗議をはさまなかつた。

俎の上で刻んで、炭を七輪に起して

『お前湯に行つて來ても好いよ』

性的學者が言ふ事もある。

朝は向ひの機械井戸から、バケツで二杯づゝ

水を汲んで來なければならぬのがつらかつた。

服従させたい心と、服従したい心

結婚外の○○

やりかけたホンヤクが終るまでは、どうしても性的學者  
は此の家に腰を据ゑて居ようと考へてゐた。

妻は東京に二十銭位で往復出來ると好いと時々コボシた  
が、或日大屋の雇人が、肥取りに來て歸つた後で

『おさつの匂ひが大變だつたはね、おさつばかり食べて



ゐるから』と言つた。

『何言つてるんだい、メロンチャンお出でお出で、ワン  
ワン見に行きませう、おんぶして』

性的學者は女の子が足許へ來てうるさく泣くので仕方な  
くあやさなければならぬのだつた。

だが夜は早くから戸を締めた。

彼等の生活は、割合平穩に終りそうだつた。

オ  
シ

齒 齒

顎 顎

鴨居 闕

踵を吸つて舌かくな

汗粉は上に飛び跳ねる

たばこのダンス

鼻骨が抜けた



(70)

頭を打ち割れ

「性」ダ、詩三ツ

陰 萎

スイトンの鍋へ入れておくれ

私は自分さへ好けりや好い男なんだから貝杓子でスクウ  
ておくれ

私は自分さへワケスの解らない男なんだから

今まで醤油色の戀ばかりしてきた

自分が私なんだろうか

(71)



(72)

舌を出して御覽なさい  
糖分が欲しいのでせう

汗粉を吸ると云ふ事は愛すると言ふ事だろうか  
あなたは今食欲なんです

自分が箸ではさめるものは何でも私なんだろうか  
何でもあなたのものです

私が情欲を匂はすとき情欲が自分なんだろうか

(73)

あなたの舌をあたくめたく思つてゐます

自分が鼻ではないんだらうか

あなたをくすぐりはしません

私が老人になつたら西洋手拭で獨りで濕布をするだらうか  
死ツ来い

自慰

殺戮者は例もあとでは疲労を感じる



(74)

二億の精虫と一匹の仔馬  
嬰兒が抱きしめられて  
うるほい深い乳房のへんに  
窒息したのは  
馬の○尾の工合か  
あまりに馬らしいのを見て  
亢奪した母親の罪だろうか  
腔の粘膜はアルカリ性らしいけれど  
直ぐ酸性に変化するらしい

(75)

人々よ  
多くの人々の言つたのを思ひ出す  
精虫よ  
だがまだきかない  
快よい疲労  
萎えた兩脚に感ぜられるとき  
多くの男は  
なぜ精虫よと呼びかけないのか  
女は罪深し  
おしやかさまは間違えてゐた



(76)

卵は月に一つしか  
分泌されないらしい  
と思はれると言ふではないか  
罪に両性がなければ  
豫め後悔しない豫定でなされる  
自慰と殺人とは  
おんなじ疲労を伴ふものだ  
思はなければならぬ  
私は思ふ

遺 精

(77)

母さんの子が  
赤い御飯の夢を見た  
父さんの孫が  
青い御酒の小便した  
息子と孫娘と別々になつて  
夢と小便とまざらなかつた



## 血 血

鼻血がグザ／＼出た。

魚の腸の様な鼻血がグザ／＼出た。

生温い處女が見たら、膝頭を顫はす程出た。

ポト／＼青臭い布團に滴つた。

咳が出て、咳が出て

首で臍を噛む様にして起き上つて、噎をしたはづみに、

ポ／＼迸り出た。

社會館の見晴らしは好かつた。

喉が痛かつた。

彼は仕様もなく腹立たしい氣持で布團をカナグツた。

二十疊位の一室に、ボール紙の厚いのが敷詰めてある、

布團が十幾つも並んでゐたのだつた。

誰もまだ歸つてゐない、トロツコ押し、製糖、淺野セメ

ントなどへみんな日和が好いと出て行つて了ふのである。

彼は刑事に腕を捻ぢられて、それを振り切りさま、擲ろ

うとした。＼は愉快そうな顔をして止めた。

麻の夏服を着た足の曲つた男だつた。彼は馬鹿に抵抗力



の強い男だと思つた。それが刑事だつたのだ。

キビ團子、キビ團子を賣つて居ないかい

何か唄へ、唄へ。Yもホロ酔ひだつた。

十錢のウイスキーを四杯づつ呑んだ、鯨のフライに空豆。

彼は其處のバーを出る時一人の男を突き轉ばした。

オイ、スベタ、サヤエンドー、ドウシタバカ

往來の人間共、片端から抱き竦めて、突き轉ばしたかつた。

何だつて亡國を喜ばないのか——

彼は二三日前に拵へた詩を唸つた。

噓をラムネとも思へ、吐く痰はアイスクリーム

Dの家で、彼は非常に嬉しくて揆ね返りそりで、中味のあ  
るゴム毬のダンスを見た。

マダ金がある。社會館の前の鼻赤で、冷酒を二合ばかり  
と白い奴一杯とで『好い氣持ですな』

Dのお母さんが言つた。

DもMちゃんも居ない。『Yさんがもう歸りますよ』

はなはだ怪しからねねねねね

オレの帽子を持つて來い、雑音ども

帽子が無くちや行かんぞ



帽子が無くちや、生きて居たくねえんだ……………  
 地べたに仰向けになつて了つた。彼の手を掴んで小さな  
 巡査が二人掛かりで引き起した、通行人が銀蠅のやうに夕  
 カツて來た。

Yは亂次モドロになつた。警察まで馬の様に追いて來た  
 此の世はシャツボだ……………  
 トウシビ野郎。

彼は常にフリマラであるので、殆んど素裸になつてゐた  
 胸から股まではだけてゐた。  
 が、それが何だ。

彼はトテモ長くなつて寝てゐる事は出来なかつた。  
 彼はくだらないケイブル仕事に行つて見た。

八丁繩手の踏切りを越えて、東海道の松並木がある。彼  
 はポンプで水をかへる事や、道路を四尺も掘り返した土や  
 砂をシヤベルで片脇へスクヒ上げる事をした。

四日ばかり行つた。箱場で小倉の古洋服に着替えて歸る  
 時、壹圓七十錢づゝ貰つて歸つた。

だから土方だと言つたら、刑事の野郎がソーカと言つた  
 だから災難だと思つて諦めてやるのだ。

水水を汲め、湯でもかんまんから飲ませ。



彼は留置場に入れられてからもドナツた。

格子の所へYが覗いて「君、君、Dに好く話しておくから」とかナンとかニタ／＼笑つて言つて行つて了つた。

Yは遅くても東京へ歸らなければならなかつた。

けれども、何だつてオレの喉を締めやがつたんだろう。

板の間に薄べり一枚敷いてある。無提灯の荷馬車屋がそこに一人寝てゐた。

それから藏品を買つて賣つた男、夏密柑を盗んだ男、喧嘩其の他色々別々の檻の中に居たわいな

彼は何もかも忘れて了ふ事を、今まで心掛けて來た男に

過ぎなかつた。

彼は巡查等が、腰掛けて休んでゐる、小使や藥罐をめぐけて、唾液とタンを吐きかけた。

アペコペ頭を擲られて、喉を掴まれて彼はヘタバツて了つた。

翌朝目が覺めた時、布團も被せて居やがらない事を彼は知つた。

囚辨、犬辨、大便、彼は缺けたお椀で湯丈のんだ。

署長の前に出て何か聞いた。

財布にめがねに帽子を受けとつて十時頃に彼は警察を出



たのである。そして詩の帳面を万年筆とインキと一緒に黒い布呂敷に包んでゐたのを無くして了つた。

彼はDの家へ行かないで、其のまゝ社會館に歸つた。

頭痛がして話しもならなかつた。

ツバをのむと喉佛が泣く。

彼は便所の洗面場で手拭を濡らして来て、額の上へ戴せた。ハナダレが喉へ流れる。

向ふ側の棚には、下駄、破れ傘、カバン、古ぼけた柳行李が置いてある。一方の壁には、麥稈帽、寝衣、帯皮、菜つ葉服が掛けてある。

東西南北、ヤツコラ硝子窓ヨ……………

窓際の机の上にはビール瓶が三四本並んでゐる。

頭に筆を縛り付けて書くと云ふ書家の老人も、たまさかに儲けに行つたのであらう。ビール瓶にさした造花に狸が食付けてある。

彼は十日も前から風邪を引いてゐたのである。

彼は蕎麥のかけが半分食ひ切れなかつた。

熱があるのである。

蜻蛉が逆立ちをした程脊柱が曲つてゐる。

彼は肉體を呪つた。



彼は理想を持った場合、時間をそこに考へる事が出来なかつた。

彼は井をかゝへて、それを戀人だと思ふ事は出来た。一寸の擦火で大海を沸騰さす事は易々たるものだ。

其處でウスノロの労働者が一人歸つて來た。彼と同じ年恰好の男である。

『今日も仕事に行きやせんかつたの』

十五錢の宿錢は、決して高いものではないのであろう。社會館には食堂もある。談話室もある。

彼の側には床屋が二人並んで寝てゐた。

赤いフランネルの腰巻をしてゐる老人の床屋、鼻の下に傷のある三十過ぎの床屋

京濱で東京まで毎朝通つて居る引き屋が彼の隣に寝た。

彼はヤカマシクて眠れない事はなかつた。

新らしく、知らない男がかはるがはる來て泊つた。

三十過ぎの床屋が、時々酔拂つて、書家の老人をいぢめた。頭を擲つた事もあつた。

老人は朝、酒屋が起きるのを待つて、ビール瓶を提げて行く。酒と水と二本づゝ提げて無くなると又行く、チャン



ボンに酔つて來ると水を飲み、醒めると酒を飲むのである。彼は鼻血が出て、鼻血が喉へ流れ込むので、釘に掛けてあつた冬ジャツを下ろして矢鱈に鼻血を吐いた。

下駄を包んである古新聞を裂いて來て、鼻の穴へ栓をしてもベトベトになる。

洗面場の金盥に頭を漬けて、三十分も俯向いてゐた頭を上げた時、コメカミへ砥石を打突けられた程ヅキヅキした眩暈がして腦貧血した。

横濱のオデオン座の樂隊は彼には馬鹿に好かつた。

遊廓の先の錢湯に這入つて、肩が寒かつた。

彼はケイブル仕事の歸りに何時でも其處の錢湯に這入つた。

彼はフラック、京濱電車の中へ這入つた。

櫻木町のステーションで下りて電信柱を見ると「カムチヤツカ漁場行樺太行人夫募集」の紙が貼り付けてあつた。

彼は戸部六丁目の野井組まで行つて見た。穢い姿が二匹居た。

今日の午後三時にカムチヤツカ行きは出發だ。

函館へ行くと八十圓借りる事が出来る。色の黒い、長い



靴下を穿いた男が言った。

北極の冰山を崩そうか

彼は八九年露領ハミロスク邊を放浪して見たかつた。

突差に決心がつかないで、半坪の其處の庭口を出た。

西洋婦人の胸は強固に見えた。

ペンキ塗りの薄暗い異人館からピアノが漏れた。

彼は何うしてヘナ／＼伊勢崎町を歩るいたか。

本屋が二軒あつた。鰻屋、支那料理、呉服店、先へ行く

と古着や

情欲がだらしのない女の踵にブラ下る。

船員も商人も、空腹になると、頭の髪を撫でる。

小母さんと連れ立つた女の後から、彼はオデオン座へ這入つた。

安來節もヘレナの昇天も彼には面白くない。

西洋映畫に男がどうして出て來るのか、彼には解らなかつた。

勇敢も、惡漢も、阿羅漢も彼は嫌ひであつた。

ジツク、ザツク、ランド、

ジツク、ザツク、ランド、

音譜のお玉杓子が動き出す。



キリギリスガオドル

コーモリガオドル

バイオリンガハネル

腰掛板に長くなつてゐた彼は起き上つた。

ポコポコポコ

コボコボコボ

ヘコマシタリタ、イタリ、カナダラヒノ

樂器が這入る。

ハサミ細工の樹陰にキリ紙のペンチが

置かれる。

彼と彼女は代る代る首を動かす、手を伸ばす  
足を擴げる。

L

j L

j L

j

Lが追ふとjが逃げる。

雞と彼女が抱き合ふ

Dが

と 梯



Y 子

の上に居る。

彼は寝台の上へ飛び上る。

蜂が出る、蟻が出る

蜻蛉返りをする。

Dが梯子を迂る、Yが迂る

彼は毛布を撥ねのける。

P O K O

O K O P

R O P O

O P O K

四拍子

彼は鋸を金槌で搔き鳴らしたかつた。

彼女のお尻を、中指で軽く打つと、色のない音が出る

オデオン座を出ると横町のオデン屋へ這入つた。彼は蒟

蒟と烏賊を食へば、活動漫画の味は解ると思つた。

電燈が灯いた。パツパツパツ

コブが出た。

彼は海岸通りを歩るいた。

黒ん坊の唇は赤くなかつた。



貨物自動車や。オートバイが随分通る八丁繩手の古道具やで、十五錢の麥稈帽を買つて居る時見たやうな外國の女で、まだ二十にならない様なのは、タントはないのである。う、そんなに恰度好い様な女には出遇はさなかつた。

支那の子供が石を投げてゐる。淫蕩を目と頬とに漲らした四十近い西洋婦人が、ベンチに横ざまに靠れてグラランドホテルの玄關を凝視してゐた。

夜會か何かがあるのかも知れない

自動車が幾臺も、幾臺も来る。

彼は陰萎と早漏に悩む青年に過ぎない

彼は月經を衄血で済ます女を想つた。

沖の方の汽船のトモの方の船底へ打突つかつた魚の鼻の頭がかすかに剥げた。

見るまにドス黒く紫色に、眞赤になつた。

彼は花崗石の柵に凭つて、憂鬱な彼の顔を明るくし様かと考へてゐた。

シュンでもシュンでも鼻血が出る。破れた粘膜も噛み棄てた、顔中血だらけになつた。

彼は體中の血を口の上から絞り出して了へと思つた。足の爪が白くなる程思ひ切つて噛んだ



(100)

血は両手に溢れ、腕に流れ、腹を濡らした。

彼はそのまま、海に飛び込んだ夢を見たのである。

六・一四

(101)

『夢を食ふ人』ご著者へ

私のおふくろが今だ本を拵へたので

御覽下さいましな

旦那、お安く致しておきますよ

辻潤がヌカしたので、俺は讀まざるを得なんだ

私は赤ん坊が食べたい、洋装した赤ん坊の息子を見ると  
革命と憎悪と反逆しか起らん

それまでまとまつたものを書いて下さい



カリガリは好えな

途中でフィルムが切れんに、歸る人を見ると、俺は愉快で堪らなんだぞ

それでは、俺のメクラの詩が、終りの行から讀んだ方が面白いのに

誰も氣が付かなかつた事は私の密かな喜びです

昔、釋尊が、説教をしようか、すまいかと迷つた事があるそうだ

何うせDADAは、だんまり虫かベスト菌位が、解るぐらひなもんだぜ

自由とか、無とか有限だとか絶対だとか  
ヌカして、喜んでゐる奴がある

宇宙は馬鹿な事に氣が付かないんだ

しかし、緻密に考へよ、もつとおごそかに思案せよだつて

實在が存在せなんだ時まで、後戻りする事は、イージイ

ゴイングなんだろうかや、DADAでねえもな  
みなダダだ

此んな俗謡が、三千年程前に一時流行した事があつた。  
私は



頭がボーツとして来るではねえか  
私はだつて

人間は五千年程未来には、人間だとか、自我だとか、言  
はれたり、言つたりして喜んでゐたものである

私は足袋だ、タアビ——は、ワタンだ。

解らないところにネウチがあるんだ

糞

ネウチなんか、ネラツとつて、シンウチになれるか

人類の死滅よりも、語字類の滅亡の方が早いなんて事は  
ないんだ

くだらねえ事、ヌカシヤがる奴は、相対性原理でも食べ  
さしてやれ

お前の體力は心ぼそい

精力は俺ぢやねえんだ

私は喜んだ事があつた

飛行機に乗らなくとも、今のところ歩くといふ事は

事實らしい

飛行機に乗りたがつてゐた、マンモス類が

何萬匹ゐたか、知らねえ

現に、衛生サツク入用の思想ばかりぢやないか



頭から、サツクをはめてやりたい面ばかりぢやねえか  
光線だつて、光波だつて、聯續してゐやしないんだ  
詩の下手な奴は、想像力に富んでる事で解る

私は日比谷の圖書館へ行きました

之は詩ぢやないか

千萬無量ぢやないか

辻潤が山本改造とか云ふ名刺に、ダダイズムの話を書いた事があつた。

此んな事を書く奴は狂人だと、アの頁に鉛筆で、書いてくれてゐた人が、あつたぢやないか

それとこれとを、聯絡さして、需要供給を平均させよう  
たつて、出来やしない。

上野の圖書館の柱には、至る所に、俺は俺の俺だとか、  
自我經のサンタン詞が出てゐるぢやないか

誤譯や、誤植に感心しない様な奴は、何うせ後頭部ばかり  
發達した、野郎に違ひない

何か貴様達に傳へなければならぬのなら

俺のツタへたいものを、貴様達の解る様にざつとツタへ  
られなくなるんだ

と言つて、俺はツナワタリがしたい譯ではない。



只俺の戀人は精神病者だと言ふ事を、お前達に、不圖した機會で、俺の、過去の世に於て、俺の母だつたらバーに知らしたい爲ばかりなんだ。

それと同時に俺は、輸精管を切つて湯屋の値下げ運動に反對したり加つたりしたいんだ

ところで、仕方がないから、私は、松永延造君に此んな風に書いても貰ひたかつたのです。

サクランボ

犬が尾を地べたに付けて寝て居た。

彼は下駄を穿いて自轉車に乗つてゐた。

彼は犬の尾の上を態と通つた。

『犬が死にましたか』

彼女が尋ねた。

彼は梯子段の唐紙に靠れて膝を立てゝゐた。



(110)

井野はサクラランボを食べてゐた。彼女は目を細める癖があつた。然しハッキリした女だつた。

煙草をのむと性欲を涸らすので、獨身の女はたばこを飲み、坐布團を敷かないでゐる話を彼女がした。

彼女は井野の居る病院へ入院し様かと言つた。

煙草をのみ過ぎるのであろうか。卒倒しそふな氣持になる事があると彼女が言つた。

井野を呑み込んでゐる彼女の態度が彼には快よかつた。

井野の厭味な所や野獸性を子供らしい汚れのないものだと思つてゐるらしかつた。

(111)

彼が栗橋在に居た頃の事であつた。

彼は電氣鍋の恩恵に與る詩を書いた。

寢床で、便秘症の、電氣鍋の音樂が聞ける。

パン粉を練つた片口が凍つてゐる。

PiRi PiRi PiRi

罍の割れる音

も炭、古下駄も下駄箱

コスモスの莖も燃して了つた。

Goso Goso Goso



米甕に敷いた新聞紙の寝返り  
鼠の小便が凍る。

壁土のコボレ

襖障子の破れ

BORO BORO BORO BORO

JAVA JAVA JAVA JAVA

涙が火鉢の灰を固める。

雪に濡れた柔らかい陽射し

臨月の彼女には眩しいだろう

たしかに胎動を感じる

消燈後の二分間

Piri Piri Piri Piri

電気鍋の恩恵にあづかる。

\* \* \*

井野は彼女の良人よりも古く 彼女を知つてゐるのだそ  
うだつた。彼女の良人は留守である事が多かつた。  
良人はヴァイオリニストであつた。

犬

かしは一羽分、掃き溜に棄てた、風が吹く  
嚙むなよワンチャン



土手端萌黄色の糞をヒル

雪解に小便するなよ

歸らないんだ、ヨ一歸らないんだ、嚙むなよワンチャン  
柿の木の枯れ枝で以て、飛び付いたらヒツパタカウと思  
つた。

Kori Kori Kori

喉を鳴らしてゐる、目を白黒してゐるだろう

隙きだらけの板の間に、ランプの灯が点る

藁葺の百姓家の雞が逃げあがいた悲鳴

何處まで追いて來るんだろう。

夜も晝も、夜も晝も、湯沸しのスープに鹽を混ぜては飲

む、此の人は飢え死ぬ氣かも知れん

黒い黴のある土の上、焚火してゐる。

轉ぶやうに走つて行つたワンチャン

溝萩の裏切り、色のないものは匂ひもないだろうか

悶えた揚句だろう、布團をスツポリ被つてゐる。

Kori Kori Kori

何にも見えなう。

兎が二匹居た『一匹上げませうか』



『病院にも大きいのが居ますよ』

井野が言つた。

彼女は目玉の赤い兎を、井野の膝の上へ放つた。井野は縮の浴衣を着てゐた。

雑巾で彼女は兎を拭いてゐた。しかし随分汚れてゐた。井野の膝の上へイキナリ投げ付けた。

『臭い、臭い』彼は井野の兎に角面白い姿を其處に見た。

彼は彼女が好きになつた。彼女が支那の扇子を出して井野にやつた。彼は其の扇子を井野の手から揉ぎ、兎が傍へ驅けて來ると防いだ。

『食ひ付きはしませんよ』彼女が言つた。

井野の膝の上へ兎が小便してゐた。井野は泣虫になつて、ダダツ子の眞似をした。赤樺色の汚點が其處に出來てゐた。

井野は指で嗅いで、熊のやうな顔をした。

『マア悪るかつたわね、御免なさい』

私何にも氣が付かなかつたのよ

洗濯して上げませう』

彼女は箆笥から緋の着物を出して、井野に着替る事を勧めた。

彼は猫の事を思つてゐた。



猫はクルクルクル廻つて引つくりかへつて死んで了つた  
 彼が小刀を眉間へ突き刺したのであつた。

小さい時、川へ泥棒猫を投げ込んで、外の子供達と騒いで沈めて了つた事があつた。

彼は色んな境遇を経て來た男であつた。

彼が或菓子屋に居た時、其家の猫が産みたての自分の狩を食べた赤黒い血を見た。

或洋食屋の皿洗ひだつた時、二階の西洋間の華電氣の下に、鼠を啣へた猫のダンスを見た。

彼は或非常に陰慘な多數の人の居る家に居た。ストオブ

に温たまつてゐた。

猫が來た。

彼は吸殻の火の付いてゐるのを、猫の脊中へやつた。毛が燃えた。猫はたまらなくなつて、床の下へ逃げ込んだ。

『火事が起つたら何うする、馬鹿』

彼は誰かに叱られた。

『随分残忍なんです、動物がお嫌ひなんでせう』

彼女が言つた。彼女はルビーをあやしてゐた。

井野は自分の性欲の強い事と、結婚した或靜かな女との事を、ブツキラ棒に話した。



彼女は良人に、初戀は幾歳の時でしたと聞くと、何時でも七ツの時だと答へるのであると言つた。

今まで何人、結婚して好いと思つた人があつたか知れない。デモ女は、何んなに親しくなつても、女同士ではそんなに打ち開けないものだと言つた。

それから女には月經があるので、アレで割合にたやすく禁欲生活が出来ると言つた。

D  
は

Dは次の室の卓子の抽斗から、封筒を一枚ヌスンでゐた。

Cは襖の隙き間から覗いて、布團が動かない様に思つた後から組み付かれて、乳の下を刺されるのかと思つたらGだつた。

それからめしやへ行つた。

黙示録の四騎士のタンゴ踊りが好かつた丈だ。

彼等は魚賣りになるが好い。



坂の上へ上つて来る大學生と小掖の娘と

O × × ×

二間ばかり

「何だ！」

Dは先にふりむいた。

「僕はO × × ×言つた奴に言ふんだ」

大學生は激昂して、乾いてゐるレインコートと角帽を娘に渡した。娘は可笑しさを止める術もなかつた。

「僕が言つたんだが。それが何うしたんです」

「いやしく——も」

「夫婦か」

Dはめがねを外した。

「僕が何んな音響を發したら不可ないのかね、O × × ×言つたのは僕なんだ

あそこの引窓が閉まると、君は自分が嘲笑された氣になりますか」

O × × ×

GはDがてれてゐたと言つた。

「解れば何でもない事です」

大學生も、晚餐に喉を詰らさねば幸だ



たゞ猥褻を虐げないで來れ

世界のアナーキストは何を探してゐるのか

Dは胸をせぼめてゐる

Gは強健な足を持つてゐる

Dは議論をしない事にしてゐる

それは憎惡で、  
「咀でも、空氣に溶かして、幾何増大  
したにしろ、  
夕方か知れてゐるではないか

此の上、何が無意味だと言ふ様な事は言はない事にして  
呉れ。

宇宙は馬鹿なんだ。

有限も馬鹿なんだ。

『君は批評が嫌ひなんだ

批評が不必要だと言ふんなら僕の後から來たまへ』

Gは社會暴動に興味を持ち、争鬭に蛆がわく程運動が儼  
つてゐると焦つてゐる。

それは彼の妹が肺病だからか

だから

救世軍の飾窓で、郷里の奴とパツタリ遇つた。

Gはチヨツキなしの脊廣に、ゴム靴を穿いてゐる。



(126)

「俺が労働者に見えるかね、それは母と妹の死に償ひする」  
Gの理想は遠大な、其處に落ち窪んだ瞳がある。

尾行は捲かなけりやならん。

彼が黒い布呂敷に、宣傳ビラを包んでゐる影が、白い壁  
に映る

Dは寝て居た、彼は取り残されるであろうか

世界觀も、釋迦も、梅毒性の脳震蕩を聯想する事

彼の皮膚の下に流れてゐる血は、同時に、火星の氷河と、  
脈搏を共にしないであろうか。

大概の馬面が、馬の子を拵へる事に吸々としてゐる。

一九一一年集

1

金盃に咲く花

撫子

昇永水

腕に注射をせぬよう

ゑん ゑん ゑんぴつ

(127)



(128)

顛倒

消ゴム

肋骨の溝に匍はす。

2

だれ無駄

ダールなのは

誤植なんだ

小脳派の人達

(129)

ボールフエア

僕の詩を運動場にしたまへ

アウト

3

耳食ふ親父か

倅の脱殻か

お前さんの死ぬのを望んでゐる

誰もが



死んでから

×

馬鹿よりも

なほ馬鹿になるの

吝嗇臭い

×

落ちついて言つて下さい

本當に稀薄な

空氣のやうなものなのですか

其の愛と云ふのは

贅澤だ

×

凡ゆるものが一つに

空色に見えるなんて

そんな目を誰かにやつたかい神様

×

舌は一つしかない

舌を噛み切る事と 噛み切らない事と

人間のする事は二つしかない

×



(132)

死んだ事にならない自殺が  
あらうか

釋迦や基督が蘇生つても

死んだ人間よりは弱いぢやろう

×

有難いと云ふ言葉と良心とか

云ふものとは 違ふんですか

どちらでもコシマキの事かと

思つて居ました

×

(133)

君は家族の事を心配しないのか

それは

時々は

僕の所有物だから

×

少し小さいぢやないか

君の自我は

そんなチヨッキ見たいなものは

脱ぎたまへ

×



(134)

思ひきりあばれたまへ  
永劫を一瞬間に走る勇氣がなくちや  
そうすると頭の痛いのが癒る

4

鬼口の女と接吻したやうな事を  
コレラ菌が話してゐた  
工場の退け時分  
一羽の行々子が

煙突に飛び込み自殺をした

5

(135)

雲と池の交合  
蓮根洗つてる  
碇泊した軍艦  
牡牛の目脂メヂが私の胸に充血した。  
枯れ薄  
泥溝



(136)

破損した風景には椅子がない  
大砲の音が  
布團を敷きに来た。

6

ふくら脛はざの腫物しゅぶつ どぢぐろい  
土氣色つちけの顔かほと手て

G A C H A G A G I A

K I

(137)

此の世はシャツボ

D D D D D

吐き出された大便に

時計の針があつた

欠伸した病人の

齒莖に

空間が出産する

痔 否

醜悪はメロデー

D A D D D D D E A D



7

都會の音が地を越え

溝を越えて来る

荷車を牽いた牛

地球から離れ落ちて

驚くものばかり

楡にらも 麥も

百姓の子も

8

小さな女の心に

あきらめを見る

花曇り

インキ瓶を空にかやせば

櫻散り

乗り合ひ飛行機の痼癢

手帳を持った狂人の姿勢は正しかった。



(140)

干涸らびた顔と  
覺束ない腰

彼女が瞬きする度悲劇が起る。

9

かしは一羽分 掃き溜に棄てた 風が吹く  
囓むなよワンヤン  
土手端 萌黄色の糞をヒル  
雪解に小便するなよ

(141)

歸らないんだよう歸らないんだ  
囓むなよワンヤン

柿の木の枯れ枝で持つて 飛び付いたらヒツバたくぞ

KORIKORIKORIKORI

喉を鳴らしてゐる

目を白黒してゐるだろう

隙きだらけの板の間にランプの灯が迂る

藁葺きの百姓家の雞が逃げあがいた悲鳴

どこまでついて来るんだろう

夜も晝も夜も



(142)

湯沸しのスープに 鹽を混ぜては呑む

此の人は餓え死ぬ氣かも知れん

黒い襷のある土の上

焚火してゐる

轉ぶように走つて行つたワンチャン

溝萩みぞはぎの裏切り

色のないものは匂ひもないだろうか

悶えた揚句やうぐだろう

布團をスツポリ被てゐる

KORI KORI KORI KORI

(143)

匂ひのない音は見えない。

10

しんだほうがえ、

樂書らくがきをした落鴈らくがんを みんなが食べた。

孕はらみ女めが それを蹴こ飛ばして歩あるき出した

梅毒性の天才ばかりになつた。

ピカソの繪は胃痙攣いけいれんの藥にもならなくなつた

子宮痙攣しよくけいれんの音樂も EPILEPSY の舞踏も流行らなくな



(144)

つた。

11

不瞬と妙香の電球を付けては撈ぎ  
 付けては撈ぎ消す  
 蠅蟻の心を鹽漬にする處女である。  
 芋にバタを付けては舐め  
 付けては舐める。  
 戀人は鈍刀である。

(145)

12

埋没々々々々々々々々  
 々々々々々々々々々々  
 氷の如き火の地底  
 白い白い白い それは白い  
 白いものはそれだけ  
 そして それだけが白い  
 うるんだ鰯の様な目



(146)

突き刺して焼くべし  
空

13

雪

真黒まっくろ

大根 暗い

汚れた手 ○○を生む牛蒡

刺身のツマにやならぬ 死 詩

(147)

涙の洪水  
流されて了ふ

14

舐塵 眠る人

活動のハネ

凭木の錆釘 女の太股

鬩ぎ合ふ情欲 穴のあいた手套

片つ方落した



氣を付けなはれ

獨りでも出るのは詮ないが

何時までも泣いてゐると 流されて了ふ

涙が滲むだら 小指の爪で

涙管を垂らして了ひなはれ

腫れぼつたい女と男と

赤い目を舐めあつてゐたら シヅカニ

黙つてソオット

涙が一杯溜つて凝視めても

快感が見えはしないから

何うしても股まで涙に浸つて

仆れそうになつても

首丈出して

流されて

流されて

何處まで行つても

目を潰つては駄目

眼球を杭に突き刺して

剥つたりするに死ねないと言ひはる人があるのだから

すなほに眼球は鯛に食はれるまで



(150)

食はれても  
食はれるとき  
食はれるまゝに。

15

たんぼゝが咲いてゐた  
黄なつほい  
くるまやが走つて行つた  
誰かの戀人を乗せて

(151)

汽車も電車もない  
心臓痲痺  
埃りが  
仰山も立たない  
一筋街  
ガクリ脛をついて  
死んで了つたんぢやないか  
可愛そうに  
とつっきの駄菓子屋に  
擔ぎ込んだ



(152)

主人が

鐵砲腹したんだ

バクチに負けて

まもなく

私の歸つた噂が立つた

くるまやが

落ちついて

走れるだろうか

私の言ふのは無理だろうか

落ちついて居れば死なゝいのか

黄ナほい

結核菌を好くたんぼぼ

私の肺が癒るだろうか

16

春と秋と未來を憎む

落魄畫家Kの母が

二十年持ち古した蝙蝠

——此の柄の所に嵌めてあるのが

(153)



(154)

眞珠なんですよ  
どんなものでも  
食物に見えない事はありません

——  
でも虚榮心の強い豚は

それを食はないでせう

お母さん

布が乾かないのに

汗が拭けませうか

春と秋を無くしても

(155)

Dは不在でした

細君が

17

かぢかんだ手で

何が書けませう

鉛敏な犬でない私に

未來の匂ひを

嗅ぐ事は出来ません



(156)

蜜柑を呉れました

雪が降りそうでした

混血兒らしい娘を連れた男が

——神の意志を見よ——

通りで叫んで居ました

歸つて

廁へ這入ると

板が外れたのか

冷い風が

下から吹きました

袂草と一緒に

蜜柑の皮を嚙んで見ました

神の意志を見ませう

歯が浮きました。

18

錐もむうれしさ

掌を合はして

力を込めて

(157)



指を反らして  
コヨリをさして  
女のよこした手紙を  
一束にして とちて  
私は雨垂れのかゝらない軒先へ  
つるしておこう  
聴て  
ほせて 好く乾いたら  
髪の毛のやうに細長く切つて  
火にあぶつて

お正月が來たら  
お雑煮の中へ入れて食べよう

鶏頭は悪黨ぶる

のだと言つて

悪黨ぶるだけだけど

鳳仙花が

詐欺をしてゐるのを



(160)

君は知らないだろう

銀蠅が猫に

悪黨ぶつて

叫いた事があつた

同じ百姓家の庭隅にも

秋が来て

姑のコスモスは

ヒステリーが起ると

妊娠の菊を

甚い目に合はす

(161)

などと 正直ぶつて

情熱の柔毛が

石竹色の空気を

ヒツツキ合つた。

20

菰をかぶせた

けむりか ほげか知らん

笹舟に



(162)

鼻をすする音

赤釜で水をすくふと

底墨が 浮く

蜜柑の皮

ゴム靴に

砂地に

踏みつけられても

なんぼでも磨ぎ汁が出る

オホ冷めた

畜生

(163)

寒いと 喜んで居やがる

白兎

枯れつ葉が

殊に醜いちやないか

霜白粉をつけて

つんとした

葱林の中を

こちらでは

お粥の泡の氷山が

また、くまに



(164)

出来上る

船大工の餓鬼が

吹かし立ての

芋の皮を放つた

あぶない

ヂユー

可愛い 一匹しか居ない

兎公

お前にとつては

物凄しい靴先

臺なしになりよつた

十能

オホ炭火

21

罌丸をおぢやにする

寒い寒い 肩ぎりしかない浴槽よか

僕は君のお母さんに生魚の精神を見た事がありますよ  
お粥の中へ味噌を入れたのがおぢやでせう

(165)



石鹼をそんなに使はないで下さい

鍋の中でアプ〜撥ね返る川魚の精神をですよ

だから君を信頼するのです

君のお母さんは多分狂人におんななさるでせう

覺悟は決めてゐたのか

はら這ひに 荳をのんでゐた

私は何の氣なしに 擦つたマッチを

其の紋々のある背中へ持つて行つた。

變な蟲が

昨夜も枕元へ這つて來たので

にらむとすぐ逃げ失せたのに

今朝になつて 再び枕の下へ現はれてゐる。

私の寢息でもうかいつてゐたのか

マッチの火を上からあてると

凝乎してゐる

何か心配事でもあるのかも知れん

二三本もマッチを擦つて



(168)

あぶると

變な足が六本ある

今まで見た事もない蟲だが

依然として動き出さない

ジューくくく

かすかに蠅の溜息のやうな

油の熱くなる音が　するやうに思つて

なほもマツチをすると

それでもがんばつてゐる

前肢の股の付け根が

(169)

赤くなつて　黒くなつて

消炭のやうに消えた

そしてフハくくと

音もしないに

仰向けに仆れた。

覺悟は決めて居たのかも知れん

此んなにまでいぢらしくも

私の手を煩はして

立派な人間のやうに

往生を遂げる蟲は



(170)

私の生涯にも數多くはあるまい

ソツと

掌にのせて

呑んでみようか

流産する胎兒のやうに

私は誰にも知らさないで

刀根川の流れに

身を沈めてみたい

氣にもなつた。

23

今度風邪が癒つたら

君はあの柚子が反抗するのを知つてゐるか

温泉へ行つて それから

戀の腹の中へ もう一遍這入つて

GARA GARA GARA GARA

隣の子が竿を落した

死なう。

(171)



(172)

24

下痢して

白い

ほそい蟲

糞壺の中

じたばたしてゐる

蟲 蟲

ぐちやわく蟲

お腹の中

だから下痢したのか

白い生大根嚙ぢるな。

25

豆腐屋が来た

戸を閉めた

豆腐も生揚も買ふまいと思つたに過ぎない

セりんの尻を叩いてる間に

(173)



(174)

電燈が灯くだろう

そしたら

女人の身には猶五障有り——の

續きを讀む

しかし却々付かない

外ではないが

まつすぐになつてゐなかつた

スキツチを 私はヒネツたに過ぎない

すると電燈がとつくから

來てゐる

(175)

そこで

お湯が沸かなきや

めしを食べないに過ぎないと

思つたに過ぎない。

26

私は隠亡おんぼろや燒き

遽あはたゞしい或旅館の娘が股を轢かれた。

霜泥の線路



ほどけたメリンスの風呂敷は

苦行僧ダイツツシの衣か

灰白くわいびやくの骨の缺片

割れた壺を抱き

脇わきに寝て 小便の音を楽しみにしてゐる。

俯うつむ向きうつむき

切斷された

生姜手しやうがで

虻あぶが飛ぶ！

電車！

誰だ！ 私の骨を拾つてゐるのは？

蕎麥屋のお内儀さんが

尻しりにしばりつけた坐布團

もう少し寒くなると

もう一枚のつけるんでさ

——腰こしが冷えると痛くてね

僕も梅毒びんがねなのか

目の縁まぶたがヒリ／＼爛やれて



(178)

背中が此んなに曲つてゐるだらう——

火鉢にかゞみ込んで言つた私

釋尊も若い時から

猫背だつたやうに思へて來た

長煙管を亭主に借りて一服

28

味噌屋の娘も

大布團を二三枚重ねて

(179)

風邪を引いたのか

寝て居たぢやないか

その原因を考へたら

或はくだらない旗を

頭にさして

太鼓を叩いて歩く

飴賣りにひつか、はる事かも知れん

もろくの女は

もろくの男に

戀せられては悩む



むつかしく おろかにも

戀せられる事が

侮辱だとは思はない

女 薩よ

私はこうして 味噌を煮えかゝつた米の中へ

入れてかきまぜる事を止そうとは思はない

ブツ／＼と泡が立つ

少しばかり厭な色をしてゐるけれど

うつむいて 湯氣に火熱らして

さしのぞくこゝ

私の顔が見える

ブツ／＼

瞬間に映じて消える泡だ

或足の小さい女を

戀し止めてから

すでによほどになる

しかしこうやつて 幾通りにも

うつる犬に

私は自分の顔を眺めるのに

飽きはしない



(182)

前から私は 女の足の匂ひが嫌ひな男だつた  
戀してゐるかどうか  
今考へるよりも  
此の味噌の匂ひが なつかしくもはなせないものだ  
氣付いてゐるのだ。

金魚  
金魚

29

(183)

出前箱

毛糸帽の小僧 打つ仆した自轉車

暗い三角形の土間 狭い上り段梯子

棺桶みたいな桶を埋めて

小便溜の様な水の中に泳いでゐる

場末の蕎麥屋の午後三時頃

刻煙草色の金魚ばかり

残念けに

五六匹が

浮き上り 沈もる



私は小倉服を被た

撫で肩の青年

何も鳴なんばん

踵の擦り切れたゴム靴

私は金魚の戀を見たと思つた。

懐爐を入れると

汗ばむ下腹

知らんまに

下帯の解ける女はないか

獨りでに水が飲みたくて

瀬戸物の犬の口を舐めると

一滴しかない

いもりの黒焼はほれぐすり

硯の墨汁も呑んで見ようか

起きるのが

大變退儀なのだよ

穢い



(186)

バケツの水 ゆすぶつて

底の方に

まだのめれば

お湯が沸くかも知れん

へたへたになつたおなか

灰をとりかへて 糞をのむ ますい

あゝあゝ

葡萄酒が飲みたい

泥々の

鼻のちぎれた女

なりんぼでもかまはない。

31

私は煙草を吸ひたくて

めしをくふ

死が嬉しくて

じとじとの

梅雨を好む。

女の足のおやゆびが

(187)



(188)

蒸發して

敷布に青臭い斑點が残る。

それが私の生涯だつたと酒精が言ふだらう。

32

唇の厚いのは仕方がないでせう

女

通り

みな閉つてゐる

(189)

凍てつく地面

下駄の音

カラコロ

どこまでも響いて行く

床屋の硝子戸

白い幕 冷い頬打

電燈の洩れる八百屋の土間

玉葱が微動してゐた

マントを被た像

背後に ハッキリ



横匍ひに

薄い影

私の足許から流れてゐた。

氣が付いて吃驚した

空つぼの 椅子の肱當に

蜘蛛がうづくまつた。

寒むがりの

肥満してゐる割に

鮫肌の

兩腕も 兩股も

よぢなつて 女

今しがた寢入つたかも知れない

それなのに

二つの影が

ボカンとして電柱に凭りかゝる

私は荳の火を擦つたけれど

顛へる手は

女の吐く息を掴まうとする

若しや

亡靈ではないか



(192)

小便をこらへてる小兒は

星と月とが

我慢して

ホットしてゐるのを知らない

頭の上を仰いだ

ブリキの傘の軒燈が

濟まない顔で

其處に氣の毒そうな色を包んでゐる

しかし勿論 兩腋に

女が居る筈がない

(193)

何時間私は

一人で歩るいてゐたのか

不思議に 二つの影が

はなれずについてくる

ふりかへり

ふりかへり

足音を忍ばせたり

おそふてくる

物の怪を脱がれうとして

橋の上から



私はマントを放り棄てた。

38

水をあれだけで  
入れなんてよかつた  
此んなにやはらかい  
飯になつたのに  
あの上入れなんてよかつた  
世の中にはよい事が

やつぱしあるのだ

しやもじをねぶりながら思ふ。

34

便所へ踞む

隙き穴

( 195 )  
蛇が止つてゐる  
唾液を吐きかける



黄色い汁を 尻の方から出す  
 プンとも ヒユンとも言はない  
 へたばりついでる  
 ベツくくとツバをハキかける  
 辛ろうじて身動きした  
 ボトリ下へ落ちた  
 なぜだらう  
 病氣なんだらうか  
 泌々とした氣になる  
 陽あたりの悪るい顔をして出る

夜なれや  
 眼瞼の黒子嚙も  
 生毛一ツ

たゞ 女房を失つたばかりで  
 悲しんでゐた蛇かも知れない  
 酸過多症に悩んでゐる私  
 めしを焚く氣にもならなんだ朝



(198)

地球がたやすく爆發する  
白む齒糞の匂ひ

36

蚯蚓に小便をひりかけると  
目が潰れると云ふ事を  
聞いた事がある  
それではひりかけてみよう  
曇り日の

(199)

涎をかぶせられた  
コスモスの 石ころの蔭  
おだやかに  
獨身を守り  
そのくせ 何もしないらしい  
無職者の蚯蚓  
ちよう  
ちよう  
ちよう と  
小便をしかける  
少しばかり すりむかれて



(200)

白くなつたやうな腹を  
うねくねらし

蚯蚓は處女のやうに

はぢらひ おどる

して止めると

長くなり 動かなくなる

かゞみ込んで 指で

いぢりたくなる

凝乎として

死んだのかと思つて

(201)

いぢくりよると

弱々しく這ひ出す

なまめかしい黒い蟲が一匹

しりについて

こがれした小ものゝやうに

いばらや

名も知れない雑草の根を

はい追ひ 飛びくゞる

責任は浮氣ものにある

私は立つて腰をのした。



(202)

37

少女の顔は潮寒むかつた  
歌つてる唄はさらはれ聲だつた。

山は火事だつた。

38

(203)

或時は米を多くし  
或時は芋を多くし  
毎朝おぢやを焚いた  
刀根川の水を バケツで一杯だけ  
掬んできて  
百匁八錢の味噌を  
一杓子づゝ入れて



(204)

二股の大根を

満月の夜

小さな隣家の野菜園から

ひっこぬいて

けづつて入れた事もある。

柿が熟れて

寝起きに竿で叩き落して

そればかり食つてゐた。

葉が庭口の軒下に

落ち積り 枯れ腐りつゝある。

(205)

どこかの蜜柑を

堀の上か

垣の間から

手を伸ばしてもぎとつて

皮を剥ぐとかぶりつく

非常においしい

食べかすも

はながみも

ハンケチも

袂の中へ入れて



(206)

だれも居ない自分のあばら家へ  
例もうさんくさく  
音のしないやうに  
瓜先立つて  
電燈の紐の たれ下つた  
下の布團に這入つて寝る。

39

躊躇は女を退屈さすもんだそうな

(207)

まつたく喧嘩腰で  
雀等が  
大屋根から  
轉がり落ちるのも  
退屈なんだからだそうな  
彼女が  
愛のない男によつて  
退屈を紛らしたのも  
雀の交尾を  
見てからなんだそうな。



U行きでせう　これ――  
さしむかひにかけてきた彼女  
窓から横つ腹を覗くと  
健康そうな婆さんだつた。  
前垂れを出して締め出す  
糸が食つ付いてるよ――  
うろく、膝をさすりまはす

前垂れのはしにくけてあつた  
解きのこしに気がつく  
それをむしつて棄てる。  
婆は笑ひもしない  
婆さん  
かぐろい秋の日の  
散策の歸り  
四哩半ばかり　汽車に乗つて  
暮れ方の紅葉  
疼々しい女



( 210 )

そんなものは見ない。

41

電燈が消えた

それは彼女が眠つたしるし

地震が揺るかも知れない

だから

起きて そつと

冷い月と話をう。

( 211 )

42

夜

蒟蒻買ひに行つた

遅く

ペロ／＼ 赤い割木の火が

空櫃の底まで舐めあかつた

朝

中學生が鮓の足を提げて來た



(212)

土釜にぬくめて煮た

中學生よ

コンニヤクを食へ

ピタ〜になつてゐる。

布團の中で言つた

腹が寒いといたい。

眞晝の秋は空が高い

ネボケまなこに

(213)

齒磨き粉がちらかされたところへ

豚肉をさけて 又來た

『俺はハ死んぢいやほか』

中學生よ

土手を下りて

まん中の家の主と

寺の娘を結びつけるな

しかし食へ

Sugar なしでも甘い

書きおきには味を付けんなな。



障子を洗ひよると  
赤犬が水のみ 赤黒い舌  
船大工の内儀さん  
芋洗ひ 十字架の亂闘  
流れて來た菜っぱ

暴風 早漏

氣にする停電  
顫へて居た ガタガタ板戸  
根たが 潰えて  
疊のはざま

青竹が生え出る  
破れ家が吹き飛ばされても  
つかまつてれば大丈夫だ

外れて 頭の上へおつかぶさつた  
枯れ蘆に繩をしぼりつけてゐた



(216)

ゴミだらけの障子

紙買ふなら

芋買ひなれ

たわしをつまんだ指の先が

冷く感ぜられた

淡墨色の向岸へ

障子に乗つて

胴顛ひしたので

想像するのを止めた。

44

右の頬ばかり陽があたつて

左の頬が寒いので

私は歩くのが厭になつた

新しいパッチを穿いて来たのに

馬糞で蒸せかへる土手へずんで

サメザメと 泣けもしない

腋の下から ふところへ

(217)



(218)

かけろふ 秋の風が  
赤とんぼと  
私をいちめるのだ。  
竹ぎれでしわいたて  
しわけるのでなし  
河川の測量技師が  
吹殻を放つたのを見ると  
後から 歸りよる女學生に  
甚い残酷かも知れない  
私は電信柱を支へるやうにして

額をおしつけて  
體をうづくまらして了つた、

45

愉快を油つこくして見ませうか  
つ、べつこくなるよ  
死んぢまひなれな

(219)

顔の青黄娘



(220)

青黄娘

娘

白ない男

腐亂した太陽と脳髓の

おでんが食べたい人は

お前さん達の頭蓋骨を

煎餅の如く頬張り乍ら 暗黒の

ダダ庵まで被居しやい。

階下が緋毛氈

餉臺

都會

45

羅宇屋の夢が市街自動車に運ばれる

心太と密豆の淺草

破り様もない 壊し様もない

デスペレートな甘酒おでん

十二階にウトウト 凭りかゝつて



北極の冰山を崩そうか  
噫をラムネとも思へ  
吐く啖はアイスクリーム  
背反し 密かに自慰ばかりしてきた男等の尻は  
こはめしの糞をするにもいたくしそう  
胸の長い女 無弾力の足  
何だつて亡國を喜ばないのか  
踏み摧け 踏み摧け  
下駄の齒を入れ替へるな  
悉く

燒鳥

小ましやくれた小娘 尻を反りくり  
懷ろで乳房をいぢくり乍ら  
腫えた眼を八方に配つて  
ガツ／＼歩るいてゐる。  
平挫やけた比良目のやうな女  
前かゞみにのめりのめり  
古風な足を内構へに千鳥らして  
海苔卷鮎の感じで飛走して行く



六十餘りの皺くちや寡婦の支那蕎麥

淫賣上りのカッレットも餘り欲しくない。

鰻々した奥様

田舎娘の天井も厭

がんとどきで 茶めしを食ふ氣にもなれず

つけ焼を嫌つた彼女には濟まない

けれどもヒステリックなカフェーで

コーヒーを吸ふ身分ではないのだから

ゆであづき

甘酒一杯上つてよう

餅肌の女中 落花生 焼芋

梅毒らしい手付きで盛る一杯十錢の

牛めしよりか

安全な女事務員のゐる郵便局で

うどんのかけを食はふ。

蝸牛は外聽道を歩るいてゐた

鼓膜の中から誰か出て來た



( 226 )

去年亡くなつた筈の蚯蚓だつた  
前庭へヒツコンで了つた  
遇ふのが耻しかつたんだらう

拙者は生れた事もなければ  
太陽舐つた事もない。

43

ジグザグランド

ジツクザツクランド

音譜のお玉杓子が動き出す

青い瓦斯燈と 眞赤な眼球と

砲弾と自動車が駆けつこする。

ガードと踏み切りと 四本の平行棒

オドル蝙蝠

螽螂がオドル

爆發!!

海嘯!!

ヴィオリンが跳ねる。

( 227 )



L Lが追ふと

L J Jが逃ける

L J

J 煙雨

砂塵

暴風

家も池も森も道も

揺らめき 吹き潰れた。

白い幕 空寂

鉄み細工の樹影に

剪り紙のペンチが置かれる

鶏と彼女が〇〇合ふ。

ポコポコポコ

コポコポコポ

洗面器と薬瓶の階調

M 光線の樂隊

加擔せよ！加擔せよ！

GO TONGOHONGOHON

墜落した飛行船

焦心した蚯蚓の接吻の亂射



Lは

と 梯

J 子

の上に居る

鋸を金槌で掻き鳴らした

彼女は寢臺へ撥ね上る

エレベーターの廻轉が止つた。

金庫の妊娠

Lが梯子を迂る Jが蜻蛉がへりをする。

KKKKAZUKO MUSK

聴診器を持つた PRICKLE

MELONMELONMELON

幻は焼かれた

フキルムは切れた。

VENTILATION

|||||

倦怠



( 232 )

額に蚯蚓が這ふ情熱

白米色のエプロンで

皿を拭くな

鼻の巢の黒い女

其處にも諧謔が燻すぶつてゐる

人生を水に溶かせ

冷めたシチューの鍋に

退屈が浮く

皿を割れ

皿を割れば

倦怠の響が出る。

56

料理人の指がぶら下つてゐる

茶碗拭きの鼻が垂れ下つてゐる

残飯生活は血なし

葱の匂ひ

庖丁の嫉視

燻すぶるものは

( 233 )



くすぶれ

51

赤煉瓦と赤貝と

それは鉋屑を背負つたプロレタリアの晚餐

擦火 擦火

擦火

擦火

挟めねいか？

52

睡眠不足の鼻を嚙む

烏賊の汁

皿小鉢の嘆き

深夜

巨大な蟹の蛇行

蕃茄油が舗道に塗られた

吸物の蓋をとれ。



ソース色の紐が

爛れたゞれ ちゞみ伸びる

四階の舞踏室の電球

地下室のセメントの剥け穴。

ポトポトポト

ポト

硝子を見透す目を持たない徐崩貌が降りて来る。

薤らっきょうに火を灯せ

北海鰈の煮付

少食の女よ

無味、無味。

尻に鬚を結つて 豚汁の鍋に

溺れてゐる 女 女

泌み渡る 女

觸れ合ふ 粘液

女

瓦斯を少し強くしやれ。



54

食堂に櫻の花が咲いた

酢鮓

瓦斯の焔が食べたい。

頬ベタ卵の殻が喰付いてるた

銀座

泥酔者の胃袋を女猫が戀しがつて

撥ねくり返つてゐる残飯桶に

55

沈着な胡麻よごし

鱈の首を揉ぎとらないで 鹽を振つた

日曜 茹卵の幻想

黄疳色の神が 跣むでるる

雨が降る

オドの匂ひから遠ざかりたい

夢に耽る胃擴張患者



(240)

なまあけの嫉妬

彼女は空腹な夜熟睡する事が出来なかつた。

53

彼女の心が此んなに平たくなつて

摘むと 中から

滑らかなものが出た

憎悪 熊の胃

白い粉末をふりかけて

(241)

満足は静脈を流れた

動脈は枯れた

僅かに恐怖の胚種が

57

食ひきれないで

スベくした股と股との

薄絹のカーテンに縋り

塵埃臭い支那の茶を飲んだ。



(242)

潰穴を食ひ破つた  
絶滅は脱落した  
再生の墓が  
其處ら中に擴けられた。

53

ダダは子供らしさに於て  
精蟲みたいだ  
兎に角扇風機を持たしてみろ

59

人生に意存はない  
たゞしんどい

パチ

ピチ

パチ

(243)

聲帯に不満があるばかり  
なだめろ



梅びしほ

脚氣衝心

60

世の中には 色んな人間が澤山居る

世の中には 色んな人間が澤山居る

お前さんは人間だよ

ふん

それで澤山だんべい

嬉れしかんべい

しびれ頭

61

ダイズムは或時寝轉んでるた

彼は起き上るらしくもなかつた

しかし不思議な事があつた。

彼は既に起きてるたのだ



(246)

硝子に削刀を當てる

62

分折したまへ

君の耳垢を

滴るものはナンセンスばかり

涙が笑ふではないか

トチチリハ

63

人間

一人の女が入院するんだ

ズボンの隠衣に滅られた破壊がある

(247)

では老衰しよう



人類

あんなに僕を戀した女が

あんなに多産だとは思はなかつた

僕の妹は 僕と同じ肺病である

メリヤスの襯衣は

不斷だ。

感情が微妙だつて

それを職工服に着替えなければならぬ



(250)

フアシスチ

66

ホトホト憎悪は溶けて了つた。

かくて反抗は

一時

ハーキヤハンゼイジョーライになつて

残るは草いきれ

世も山も

メンセビキ

作創  
ダダイストの睡眠



私は便所の扉を開けたのだつた。

誰も這入つて居ないのかやすすくと開いた。

もちろん公園の夜はまだ賑やかだつた。

私が扉を開けた拍子に、

私はふらくした。女の乳に吸ひ付く様に手を伸ばすと、女が「キャアッ」と叫んだ。薄穢い女だと思ふと同時に私は一步便所の中へ踏み込んでゐた。

すると男が後から飛んで来て、矢庭に私の横面を厭と言ふほど五つ六つ

平手打を食はした。

私はたゞ茫然してゐた。眼鏡も何處かへ割れて飛んで了つた。

「しやら臭い眞似をしまんな」

斯う言ふと男と私は組み打をする譯にも行かなんだ。男は女の亭主らしかつた。

人が多勢集まつて来て、

「スリだつか」

とか何とか勝手な下馬評を初め出して、散々に擲られそうなので、私はめがねを探すことも出来ず、顔を見られない様にコソコソと其處を逃げたのだつた。



Mと言ふ子爵か公爵の兄貴が外交官をして居る、その弟で、小説家だとか聞いた事のある名前だったが、新らしき村を拵へる爲に態々、東京から京都にも寄つて演説をした。今夜は土佐堀の青年會館でやると言ふ新聞の廣告を見て私も出掛けて見た。

M氏が出るまでに「私は鞆を持つて働く百姓の方では自信がある」とか何とか、

「列車の番號が極つて四六九八で、私が停車場へ行つたら、人が慄かれて死んで居た」とか言つた様な事を二三人出て、代る／＼話した様だつた。

私は都合に依つたら、M氏に逢つて金を融通して戴かうと思つて來たの

に、退屈した。

M氏は密附を募る事が、よつほど好きな人の様に私は感じさせられた。

M氏は此んな事を言つた。

「他人を犠牲にする事をより少くすると同時に、自己を他人の犠牲にする事もより少くして、私達はなるべく自分に必要な事は、自分でする様に、他人をわづらはさないでも生きてゆける様な時代が早く來る様に努め様と思ひます。そうした試みを企てても好い時代が現に來て居ると信じて居ます」

それから演説の途中で、口を噤んで了つて、

二十分も黙つて居てから、



「私は自分の言つて居る事が、何だか、蓄音機の様で、みなさんの中に一人でも、私の氣分のピッタリするのを妨げられる方があるとお話しが出来ないので」と言つた。

私はピッタリとM氏の言ふ事が頭に這入らなんだが、十一時頃に閉會になつて、一番後まで残つて、外に出ると、M氏が細君らしい女と、通りにあつて、連れの出るのを待つてゐた。

話すのなら今だと私は思つた。

「僕はめがねを割つて不自由なのですが、あなたの掛けておられるめがねを、私に下さるか、私は金がないので、めがねを買ふ事が出来ませんので」斯う言つて、M氏が應ぜなんだら、飛び付いて、私よりもM氏は脊が高

いので、めがねの蔓を引つかんで、とつて逃げてやると考へたのだが、其の中にM氏は、車に乗つて行つて了つた。

私は何うする事も出来なんだ。

青年會館の横わきの、板塀で圍つた所に錠が掛かつてゐたが、しばらくして人がみんな歸つて了つてから、私は其の錠前を強く押すと釘が抜けて開いたので、中へ這入つた。

大八車が一臺置いてあるきりだつた。

私は其の夜は、そこで眠つた。

x

次の日私は、市中の或る神社の境内で、腰の折れた婆さんが、麥茶の接



待をしてゐる傍の、廣い涼み臺の上に寢轉んでゐた。

廣い鏝の、何時も私の被て居る帽子を、顔の上へのつけて、子守や娘や子供が、大勢騒いでゐるのを、夢の様に聞いて居ると、知らぬ間に眠つて了つた。

目を覺ますと、私と一緒に横に休んでゐたのか、地下足袋を穿いた男が起き上つて鳥井の方へ行つた。

私は矢張凝乎してゐた。最う寝るのも飽いたので、私は欠伸をするため肱を突つ張つたのだ。

大きい縞の財布。今の男のに違ひなかつた。私は婆さんに見られない様に、それを懐へ入れた。而して男が引き返して來ない中に、同じ鳥井の方

から境内を出た。

「何とまあ、幸運が、天から降つて地から湧いた様に、私に恵まれたのだらう」

私はセリフでも使ひたいやうな氣になつて、直ぐ其處の洋食屋に飛び込んだ。

x

私は或時は非常に腹が減つてゐた。

殆んど四日ばかりも飯を食はない事があつた。薄暗い夜明け方、圖書館の石段を下りる時、上半身が、へとくになつた腹をへし折つて前へのめりそうだった。



白い靴をはいて、夏帽の軽さうな男や、涼しい女が朝の公園を元氣さうに、飛びまはつて、散歩してゐるのを、私は腰掛けにぐなぐにへたばりついた儘、恨めしさうに見て居るのだつた。

戀は贅澤だと心から思はれるのだつた。

砂が這入つてゐて嚙めないの、吐き出した御飯でも構はない、私に投げ與へてくれ、ば、一人の女の肉よりも、私は何んなにも嬉しく喜ぶのだと思ふのだつた。

が何んな場合でも、氣を落してはならない理由は、氣一つで起ち上つて道頓堀へでもふらく、彷徨つてゆく事が出来るからだつた。その日私は道頓堀の或る鰻屋へ這入つた。忙しい扇風機のそばへ腰を下ろして、私は鰻

の井を二つ食つて了つた。

隙を見て私は、一錢もない財布を持った儘、釣錢を勘定する風をしながら、落ちついて其處を出た。

x

公園のベンチに腰をかけてゐると、橋から降りて來た三十四五位の縞の羽織を着た男が、私の前に立止つた。

そして小聲で、

「一寸僕について來てくれたまへ少し要事があるんだ——何、僕は警察のものだがね」と言つた。

私は冗談だろうと思つて凝乎して居たが、男があまり眞顔なので、



「用事なら此處でも済むでせう」と言つてみた。

けれど男が「君の爲だから」と言つて聞かないので、遂々ついて行く事にした。

二人の労働者は、話を止めて怪訝そうに見てゐた。

すると、も一人若い男が、私と同じ様についてゆくのだつた。

「斯うして歩いてりや、君がまさか拘引されると思ふものはないよ」と男は言ふのだつた。

私は、やはり嘘だらう、何處か面白い所へ連れて行くのかも知れないと思ひながら歩るいてゐるが、電車路を横切ぎつて河沿ひに二三丁も行くと何時の間にか、高い煉瓦建の警察の前へ來てゐた。

男はつかくくと石段を踏んで、中へ這入つて行く。私は逃げる事も出来ないで、やつぱり後からついて行くと、男は帽子を脱いで大勢居る中の署長か何かに、お辭儀をした。

そして其處へは上らないで、土間傳ひに奥へ這入つて、六疊位の穢い部屋へ私達を連れ込んだ。

「刑事の溜りだな」と私は直ぐ思つた。

色の褪めた烏打帽や半纏や、色々な帽子が、一方の壁の釘に掛けてある。

昔の寺小屋に使つてゐた様な机の前に、髯を生やした一人の刑事が座つて、其の前に畏まつて居る三人の、これも私と同じ様に引つぱつて來らしい男の姓名や住所を聞いて、一々野紙に書き付けてゐた。



「お前の足袋を脱いで出せ」

刑事が言つたので、私は足袋を脱いで、一方の隅に坐つた。

「署長は博奕犯さへ上げりや、好いと言ふんやろ」

刑事同士で、此んな會話をさ、やき合つた後、私を連れて來た刑事は、も一人の男を別の室へ連れて行つて、訊問して居るらしかつた。私は暫らく待つて居たが、三人の男が、一人一人「酒はのむか」とか「博奕は何時から打ち出したのか」とか、「お前は二年前に一度入獄したのだな」とかはれたりするのを、仕方なく聞いて居た。

二十分ばかりすると、先の刑事が來て私を呼んだ。

重い扉を押して這入ると、卓子があつて、椅が二つ置いてある。私と刑

事とは向ひ合つて掛けた。

刑事は先づ足袋から初めた。

「此のお前の足袋の裏を見ろ。當り前の道を歩いたんなら、斯んなに汚れる筈はないぢやないか」と言つた。

私は態と泣き出しそふな聲を出して、

「私は少し脚氣で、足が充分でないものですから、時々下駄が脱けたりしますので」と言つた。

而して刑事の硯箱の隣りに、變な恰好の白い花瓶が置いてある其れに差してあつた、枯れて莖ばかりの何かの草を見てゐた。

「嘘を吐け」刑事は怒鳴つたが、懐ろから紙を出して、其の上へ私の住所



姓名本籍を記入しだした。

「此のお前の居る所は、お前の叔父さんだな。其の洋食屋を出てから、お前は何もしてゐないのだな」と問ふ。

それから筆を措いて、

「嘘を言つたつて駄目だぞ。お前が何も殺人や強盗犯だとは言はないが、

此んな足袋を穿いて居て何をしたか、お前の顔を見りや直ぐ解る。お前の持つて居るものを皆出して見ろ」と言つた。

私は財布や、鉛筆差しに差してあるナイフや、時計をも出して卓子の上へのせた。

刑事は傍へ寄つて来て、私の両方の袂を探つたりしたが、外に何にもな

かつたので、臆て財布をとつてあげた。

中には五十錢銀貨と、一圓札一枚と、銅貨と、私の小さな認めしかなかつた。

次にナイフを抜いて、少し錆びた刃を、掌に當てたりしたが、時計を持つと、

「搔つ拂つたのだらう」

蓋をあけて見て、

「金鍍金ぢやないか、盗つてからナイフで削つたのだな」私を睨むだ。

私は少しあわてたが、

「私の兄貴に國を出る時貰つたので、悪るいので元から剥けてゐたのです」



言つた。

刑事はまた怒鳴つた。

「嘘を吐いたつて駄目だぞ

お前は泥棒したらう。澤山の人の中から、俺が怪しいと睨むだのに間違ひはない。

お前が小さい時から泥棒だつたとは言はないが、大阪へ来てからやつたらう。

お前のやつた事を言つて見い」

私は涙が滲むだが、俯向いて、頭を下けた丈で黙つて居た。

「誰だつて捕えて来て調べたら、悪い事をしないものは一人もないのだ」

私は何か一つ丈言つてやらうと思つた。  
それで、

「國を出ますとき、少し借金がありましたので、夫で母にも黙つて大阪へ來たんですが、何日か金を儲けたら送らうと思つておりますので」と言つた。

「うん、

大阪へ来て何かやつたらう。言つて見い」

「い、エ、何も叔父の厄介になつて居ますので、近い中に何處かの會社にでも、雇つて貰ふ考へでをります」

私は刑事の腕組をした顔を覗き込む様にして言つた。



刑事は落膽した様だつた。

暫らくして、

「夫ぢや、今日だけは放免してやるから歸れ、叔父の家だなんて、嘘だつたら、許さないぞ」

斯う言つて財布や時計を、私の方へ還してくれた。

私は嬉れしかつたが、足袋を持つたま、刑事に禮をして、態々悄然として其處を出た。

椅子に掛けたま、刑事は動かなかつた。

x

十日程経つた。私は叔父の家へ行つて見様と思つた。もう晝過ぎなので、

叔父は會社へ出て留守に違ひなかつた。

私が田甫の小徑を通つて、黒い板の裏門の前まで來ると、叔父の二番目の男の子が遊んで居た。

「達ちやん、母ちやんは居るか？」と聞くと、

「母ちやん居ない、死んだ」

斯う言つたきり、走つて行つた。

伯母さんは私が居た時分、産後の脚氣で、水道の栓を捻ぢるのさへ、大儀そうにして居た事はしてゐたが、眞當だらうかと思つたので、私は門をくゞつて、戸口に立つた。

誰も居なかつた。



戸をあけると、格子の内ら側に、牛乳瓶が二本置いてあつた。

私はそれを袂の中へ入れて外へ出た。

「みんなボロリ／＼死んで了ふ」

そのまゝ、かへり掛けたのだつた。

何處の工場の裏の、石炭殻の積んである掃溜の様な所まで来て、傍の草の上へ坐つて、おほむいて夕焼雲を見乍ら、二本とも飲んで了つた。

濁つた前の泥溝下水に、牛乳瓶を投げ込むと、すぐ沈んで了つたが、臆てゴブ／＼と泡を立て、居た。

x

公園の柵に凭れて、河の水を見て居る女が居たので、私も三尺程離れて

柵に凭れて、其の女の顔をうかがつた。

月のない或晩だつた。

束髪に結つた女の顔は小さかつたが可成ととのつてゐた。着物はあまりケバ／＼したものではなかつた。

私は段々と傍へ寄つて、女の手の手の上へ手をのつけても、女が凝乎として居るので、私は言つた。

「何を見てるの」

女は薄笑ひした様だつた。

「こつちへ行きませんか」

私は女の肩へ手を廻して、引つ張る様になると、女はたやすく動いた。



なんなく私は、女と一緒に手を引き合ふ様にして、胸ぎり位の何かの綱が張つてあつた様に思つたが、それを飛び超えて、二人で圖書館の横わきの、板圍ひの中へ這入つて、石の上へ腰を掛けた。

女は拒む様な事を少しもしなかつた。

追つかけても來ないし、金をくれとも言はない淫賣があるだらうかと私は思つた。それに一口も物を言はなかつたのが不思議だつた。啞だつたのかも知れないは私と思つた。「何んな風をして居るか、最う一遍行つて見てやれ」と思つて、私は引き還して元の場所へ行つて見ると、もう女はそこには居なかつた。

私は心残りだつた。

何にも其處には落ちて居なかつた。

夏も終りになつて、秋が近づいた公園の夜は大分更けてゐた。

私は石段の上にて、其の夜ほどK子を戀しく思つた事はなかつた。

郷里の事が懐しまれて、無性に淋しかつた。



跋



## TKFSYNQJCHZ

ちきふしんくいっち

辻 潤

新吉にはたしかに和製ランボオの資格があるが、あいにく己が、エルレイ  
ヌでないことは甚だ遺憾だ。

彼を知つてから恰度丸一年になる。今、僕が住んでゐるK町へ越してか  
ら間もなくのことで、暮に近いどんより曇つた日の午後、一人の青年が尋

ねて来た。

ねづみ色の外套、首に巻きつけた色のわからないやうになつたハンケチ  
糞しめたやうな風呂敷包、バスケット、草履を穿いた汚ない足、モチャク  
の頭、鐵縁の奥に光かつてゐる鋭い黒い眼付、——どつから見てもブル  
ジョアの玄關拂ひを食はせられる資格は充分に備へてゐた。そして、彼が  
風雨と日光の洗禮を受けてゐることだけは一眼でわかつた。

彼の尋ねて来た用事と云ふのは、前から僕に會いたいと思つてゐたこと  
のほか、その頃僕の出した「自我經」が讀みたいが、高いので自分には買へ  
ないから、もし手許にあるなら貸してもらひたいと云ふのであつた。そし  
て、それ以前に出した「唯一者とその所有」は買つて讀んだと云ふことであ



つた。

しかし、假りにこの種の青年が、一人や二人なら兎に角、来る度に同じやうなことを云つて、僕から本をロハでせしめてゆくとすれば僕たる者はやりきれない——それに、スチルネルをこの青年がどの程度に理解してゐるのだらう、先づそれから試験してやれと、僕はそれとなく、彼の讀後の感想と云ふやうなことにこつつけて色々と訊ねてみた。

しかし、僕はすぐ後で、そんなことを訊ねたことのセンエツさを後悔しなければならなかつた。

彼はバスケットから、小形の古新聞を出して讀んできかせた、それは彼が國にゐる時書いたもので、題は「大概詩」と云ふのだが、一種の論文で、

それにはスチルネルの影響がかなり濃厚に出てゐた。

彼は實によくスチルネルを理解してゐた。

あいにく僕は手許に一冊も「自我經」を持つてゐなかつたので、彼の爲めに本屋へ宛てて名刺を書いた。

ロハでもらふのは氣の毒だからと云つて、彼は二圓なにがしをなけなしのサイフから出したが、僕はそれをもらふ氣にはなれなかつた。

「では、これを置いて行きませう」と云つて、新吉は謄寫版刷りの横トヂの詩集を二冊出して前へ置いた。それから、暇の時に讀んでくれと云つて原稿のトヂたのを二冊出した、一ツは「ダダイストの睡眠」と云ふ彼の手記で、一ツは「黒子」と題する小説であつた。



その頃、彼は栗橋の舟戸と云ふところゐた、利根川べりの不思議な一軒家で自炊生活をしてゐたのであつた。

「甚い暴風、氣にする××停電、顫へてゐた。ガタ／＼板戸、ねたがつえて疊のはざま、青竹が生え出る、破れ家が吹きとばされても、つかまつてれば大丈夫だ——」

「夜、コンニヤク買ひに行つた遅く、へろ／＼と赤い割木の火が、空櫃の底まで舐めあがつた——」

こんな風なものが彼の生活から産れた。

間もなく彼は東京へ出て来た、——ソバヤのデマへ、しる／＼屋の手傳ひ

——それから、N新聞社の食堂の飯盛り、——彼はその最後の職業によつて永い間充されなかつた口腹の慾望を充分に満足させた、とある時僕に話した。

彼がタスキ掛けで働らいてゐるところへ、僕は二三度訪問した。「皿皿皿皿皿……」と彼はいつまでも唸やいてゐたやうだつた。

二三十圓、金が出来たら、上海へ行くと云つてゐた、上海はその時分から、彼の憧憬のエルドラドであつた。

金が三月ばかりゐる間に出来たので、少し休養して本でも讀むと云つてK町へやつて来た。その頃、僕のところにはIと云ふ畫家や、Vと云ふ男などがゴロ／＼してゐた。



新吉はK町の社會館に陣どつて、折々僕のところへやつて來た、——氣が向くと八丁畷の土方の工事の手傳ひなどしてゐた。

詩が出来る、必ず僕に讀んできかせて、批評させるのだが、しまいに少しウルサクなつた。しかしそれは僕にとつて一つの慰さめでもあつた。春夫や、黒石や——その他、僕の知つてゐる範圍の連中で、彼が遇つてみたいと云ふ人達に僕は紹介したり、原稿の賣り口を頼んだりした。しかし、僕の推奨位では、中々オイツレと原稿の捌け口はめつからなかつた。彼は自分の健康状態をかなり強く意識して不安を感じてゐた爲めか、しきりに焦つてゐた。

光造か「熱風」を出すやうになつたので、僕は早速、彼の原稿の掲載を

依頼した。

「ダダイストの睡眠」はある一部の人達の注意をかなり惹いたやうだつた。

現實のどん底にうめき苦しんでゐる時でも彼は自分の藝術を愛惜するところを決して忘れはしなかつた。

彼の精神は異常な自信と、激烈な絶望のエレベエタアを始終上下してゐた。

ある時などは、自殺の衝動にかられて、横濱の埠頭から數百枚の詩稿を投げ込んだことさへある。

ダダはある一ツの藝術にのみ限られてはない、新吉の詩は彼の生活で、



宗教で同時にまた哲學でもある。

金石山出石寺に彼が御小僧をしてゐた時に大藏經を片端から讀破して、ダダの精神を體得し、それをスチネルに翻譯して、舐瓜詩を制作したのだ。宇宙は馬鹿だつてことを知らないんだ。

この世はシャツボ、そして繪に描いたキリストがトコロテンに戀し、オタマジャクシがマリアに接吻するのである。

蛤が雀になり、山の芋が鰻になることなどはあまりに家常の茶飯事である。

ダダの頭と心臓とはいバイロケエションとデイヴガシオンとがいつまで巢を食つてゐる。

そして、かなり常識を熱愛してゐるのである。

そこから、狂氣と痴呆とナンセンスとエクセントリックの交響樂が生れて來る。

ダダはドンキオテの誇大妄想と、ハムレットの卑屈さとを同時に兼ね備つて、未來派と表現派の軌道を逸して歩く。

新吉はカタハシと呼ばれることよとも、ダガバシと呼ばれることが好きなこと程左様に濁音を愛してゐる。

根津の藍染川のドブネズミが上野の圖書館へ通つて、その往復に歌をうたつてゐると云ふ感じがする。

彼は決してクラルテではあり得ない。



蓄膿症と、脚氣衝心と、變態性慾とのデイスコルドだ。

彼はまるで近代的苦惱の權化である。

彼は人生の盃の底の最後の滓を舐めたところから出發してゐる。そして、ダダ以前の一切の觀念を投げ棄てた。

では、ソシヤリズムや、アナアキズムが食べられないものだ、何人が斷言し得るだらう。

この世は餌食だ、餌食は自分だ。

彼は「餌食」と云ふ言葉を非常に愛してゐた。

自分は自己以外の一切を享樂する、そして又自分も他によつて享樂される。これが、スチルネルの最後の意義だ。

享樂とは餌食になると云ふこと以外になにを意味することが出来るのか？

新吉は正氣になつたと稱して遂に狂氣した。彼はダダを生活に體現して詩歌を嘲笑した。ボエム・モンガアは果して顔色があるだらうか？

昔も今も、恐らくこれからもさうだらうが深い藝術は上品な書齋や、學校や、書物の智識から生れては來ない。――

藝術は恐ろしい遊戯だ、アヴンチュウルだ、スペキュレーションだ。

新吉の詩集は、ブルジョア家庭の讀物や、學校の教科書や、クリスマス  
の贈り物にはならないだらう。



彼はダダの精神を最初に最も強く、深く把握した日本に於ける先覺者だ。

僕の紹介は少しく蛇足に過ぎた。

彼自身の作品は遙かに強く、直接に諸君にそれを展開することであらう。

現代は危機に瀕してゐた。新興精神のペンデュラムは益々大きく、強く

振動して、不安と激動の濁流を滔天させずには置かないであらう。(一九二

二年十二月)



大正十二年二月十日印刷  
大正十二年二月十五日發行

(定價壹圓五拾錢)

編者 辻 潤

東京市本郷區湯島六ノ廿

發行者 田口鏡次郎

東京市芝區榮房町十五

印刷者 一増定次郎

東京本郷湯島六丁目廿番地

(日本美術學院内)

發行所 中央美術社

一増印刷所印行



露 國　　デ・ブルリユツク  
木　下　　秀　　共　著

# 未來派とは？ 答へる

定 價  
金貳圓貳拾錢

原色版・コロタイプ・網目版・多数挿入

ブルリユツク氏は未來派の作家として著名の人、日本未來派美術協會の幹部木下氏と共に此著を公けにした。分りにくい未來派は此著に依て何人にも理解されるのである、一旦分つて見ると此派の作の如何に深刻で如何に人生味の深いものかに愕くであらう。挿入の圖版は未來派の構成に重要な分子として活きた説明となつてゐる



